

日本人歌

前川佐美雄主宰



一月號

昭和三十三年十二月十五日印刷 昭和二十九年八月十九日才三種郵便物認可
 昭和三十三年十二月二十日発行 (毎月一回二十日発行) 日本歌人才十卷才一号 (通巻一五九号)

昭和三十三年十二月十五日印刷 昭和二十九年八月十九日才三種郵便物認可
 昭和三十三年十二月二十日発行 (毎月一回二十日発行) 日本歌人才十卷才一号 (通巻一五九号)

定価 八十円 (送料八円)

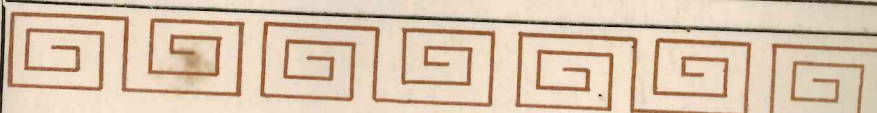
結婚式
 御披露宴
 大小宴会は



是非御氣輕に
 便利で静か
 松平で

ホテル 松 平 東京新宿四谷

電話 (35) 1171~6 中央線信濃町下車三分



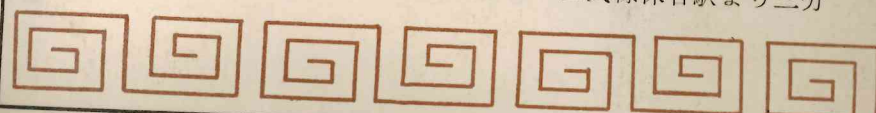
御婚禮に
 御披露宴に
 御商談に
 御会食に
 パーティに

豪華な風趣
 お氣輕に
 二賞味頂ける



保谷
 武蔵野

電話 (99) 7270 西武線保谷駅より三分



日 本 歌 人

1959年

1月号

日本歌人東京発行について

前川佐美雄

日本歌人は昭和九年の創刊であるから、今年で二十五年目になる。戦前はどうか毎月出たが、戦後は遅刊体刊のしつづけである。それに戦争中は雑誌は出せなかつたから、数へてわづか百五十号ぐらゐしか出てゐない。だから一向に発展がしないのである。考へてみると甚だ香ばしからぬ、又、実に面目のないありさまである。このことは勿論私の責任である。罪なことをしたとは思ふけれど、そのことは言ふまい。言つたところで何になるのか。言はなくても分つてゐることである。それよりはこの奈良といふ所がよくないのだ。これはよその人には分らない。説明しても分つて貰へない。住んでみなくては分らないのである。だからこれは奈良の代に横死したもろもろの人々の怨霊の祟りだらうと言つて胡麻化すことにしてゐる。しかしこれは胡麻化してない。實際その通りなのだけれど、人々は信用しないだけのことである。奈良から雑誌を出すといふことがそもそも無理だつたのである。それを敢へて押し切つて来たのは歴史の何たるかを知らなかつた私の無知さによる。日本歌人はこの奈良から抜け出さない限り発展はないのだ。かねがね東京に移したいといふ考へは持つてゐた。それは久しく持ちつづけてゐたが、なかなか機会が到来しなかつたといふのが正直なところである。それが今やうやくかなへられたのである。これは私のよろこびであると共に日本歌人のよろこびである。果して東京がそれほどよいのか。歌よみとして歌作するためにはなほ様々の疑問はあらうが、雑誌を出すためには東京ぐらゐの都合のよいところはない。世界人口の多い東京である。言はずとも知れたことである。けれども私は東京のすべてがよいとは思つてゐない。これまでも度々「東京民族」と言ひ、又その歌よみを「東京歌人」などと言つて色々に批判して来た。確かに奈良よりは田舎だけれど、地の利、時の勢ひは言ふべくもない。

私は日本歌人の運営を新しい常任幹事の諸氏にお任せした。なかでも東京の常任幹事諸氏をたよりとして日本歌人の発行を東京に移すことにしたのである。東京側の同人も会員も情熱に燃えてゐる。そしてその態勢は万全である。これからの日本歌人は毎月順調に出るだらう。そして追々に、又、急速に発展するに違ひない。これは日本歌人同人会員全体のよろこびである。そこで私のすることは選歌だけである。これは今迄よりも一層精根をつくすつもりである。同時に久しく怠つてゐた私自身の作歌回復に努力するつもりだ。昨今の歌壇は狂気じみてゐる。今のままで歌壇はもちろん歌そのものがダメになる。既にダメになつてゐるとも言へる。このへんで「日本歌人」が本来の面目を発揮し、正統の立場から正統の歌を作ることが最も肝要であると考へる。

日 本 歌 人 一 月 号 目 次

| | |
|-----------------------|------------|
| 日本歌人東京発行について | 前川佐美雄 (3) |
| 作 品 I | (4) |
| 作 品 II | (11) |
| 短歌の読者 III | 斎藤正二 (21) |
| 再び伝統について | 中川忠夫 (20) |
| 愛情の中国的表現 | 田中克己 (25) |
| 一 月 集 I | (27) |
| 一 月 集 II | (36) |
| 才三回日本歌人賞発表 | (48) |
| 「短歌の限界」論議(歌壇時評) | 前 登志夫 (53) |
| 詩人の体感 | 古川政記 (55) |
| 才七回夏行記・秋の歌会記・和歌山支部歌会記 | (56) |
| 編集後記 | 石川信夫他 (58) |

表紙・井上三綱

る。

前川氏は短歌を短歌たらしめる要素が一にも二にも「うたふ」といふことだと規定した後、短歌に現実性や内容の深き厚きなどを求めてならないと続ける。「時局が峻烈化して来たから、歌そのものも峻烈化しなければならぬ」といふやうな主張くらゐまことしやかな嘘はないとも言っている。そして前川氏の芸術論として重要な提示に入つてゆく。すなはち、

「歌ははかないもの、たよりないものである。たよりないもの、はかないものであればこそ歌なのである。歌がたよりあるもの、はかないものであつたら、すでに遠い昔に滅亡している筈である。……さういふのが本当の歌どころである。全面的生活を直接に歌ひあげるとか、ひたむきな生命を歌ふとかいふのは言葉としてはいいかも知れぬが、実はそんなものより更にその上にある余裕の心だ。歌はいつでも余裕の心からしか生れない。……はかないもの、たよりないものでも少しも構はぬ。はかないもの、たよりないものであればこそ、他の文学や芸術でやれぬことがやれたのである。さういふ根本的な所へ今日の歌人はもう一度思いを馳せる必要がある。歌が無用のものであることをもう一度考へるべきだ。無用の用と言ふことはそのあとである。」

西行や実朝の生きていた時代にも社会混乱はこんにちに劣らず甚しかつたであらうが、西行は吉野山に最初に桜を植えたのはどんな人物であつたらうかと遙かに時間の原初に想いを馳せ、実朝は夕暮まで庭隅に見えていた萩の花が月光と共に其の影をはかなくも失つたと歌つて空間の涯に想ひ遣つた。これこそ「歌ごころ」と謂ふべきものであつて、短歌だけがこのメタフィジックの世界を表現することが出来たの

である。はかないと言へば餘りにもはかないが、これが詩というものの本質である。歌のおのづからにして把へた此の空無こそ、われわれが生活現実とか社会現象とか稱している存在物を一皮剥いた実相の世界ではないか。これを無常感といふ言葉で呼んでもよい。短歌が芸術的に秀れてゐるか否かの判別は、この空無を表現し得ているか得ないかによつて決まるのである。その限り短歌は無用に違ひないが、或る種の人間にとつてはこれで全部である。実朝はクー・デタで生命を斃されたが、人事のはかなさを世界のはかなさの裡に予め視届けてゐた。クー・デタを未然に防がなかつた姿勢を「敗北の抒情」といふやうな定り文句で決め附ける人種は、精神衛生的見地からも、最初から歌など読まぬほうが為に良いのだ。

短歌の文学的達成とはそれ以外にない。折口信夫は「短歌は握りしめてしまへばみな消えてしまつて、何も残らない」（「俳句と近代詩」）あの雪のやうなものだといふ表現法を用ひてゐる。「よんだ瞬間に、歌の内容は飛んで行つてしまつて、何もうたはなかつた、何も内容を持つて居ない空に立ち戻つてゐる」（同）、「それをうけ入れる側からは、のどかな音楽として流れて来、又流れて行つてしまふ。さういふ印象が残るだけです。とにかく無内容といふことは、何もなはいふことぢやない。清らかな印象が心に残つた、といふことだけはあります」（同）と言ひ、これが短歌の本質だと言ふのである。太初に「うた」の響きがあつて、歌つてゐるうちに自然に歌の内容が纏綿して現れるのが短歌の制作動機（コトバ）の成立過程であるとすれば、今日の歌人はなんと野放図の出鱈目と投機を意図していることか。「はかなさ」ゆゑに短歌を愛するのではなくては、真の歌びとは謂へないと想ふ。就中現代短歌は古典に学ぶ必要がある。

愛情の中国的表現

田中克己

今年の長い夏休みもあと数日で終りとなるが、何をしてゐたかと問はれると答へやうがない、ただ数週間だけはひどい難問を課せられて学生時代を思ひ出す苦しみ方をした。難問は「東洋の愛情とその表現の特徴」といふので、それを三十枚で書いて、東洋思想講座に加へるといふのであつた。

東洋の定義もむづかしいが、これには先人の定義がある。その愛情の表現の特徴は何であらうか。さまざま考へたあげく、まあまあ書きあげて書肆にとどけたが、今日、神田を歩いて椿城傑先生の「白居易評伝」といふのをみつけ、買つて来て読んでみると、かういふ一節が見つかつた。

「彼の新婚後の一首『贈内詩』ではいつてゐる。

生キテハ同室ノ親シミヲ為シ、死シテハ同穴ノ塵ト為ル。他人スラ尚ホ相勉ム、而シテ況ンヤ我ト君トヲヤ。……人生レテ未タ死セザルノ間、其ノ身ヲ忘ル能ハズ。須ツ所ノ者ハ衣食、飽ト温トニ過ギズ。

蔬食モ飢ヲ充スニ足ル、何ゾ必ズシモ膏粱ノ珍ノミナラン。絮（綿）首モ寒ヲ禦グニ足ル、何ゾ必ズシモ錦繡ノ文ノミナラン。君が家ニ遺訓アリ、清白子孫ニ遺ス。我モ亦タ貞苦ノ士、君ト新タニ婚ヲ結ブ。

庶（コトバ）ハクハ貧ト素ト保チ、偕ニ老イテ同ニ欣々タラン。白居易の男女の愛情に対する見方は極めて先進的で、彼は封建社会の庄底下にある婦女の運命に対して、非常に同情的である。彼はたびたび統治階級が金銭や権力を用ゐて婦女を欺圧し婦女を玩弄するのに反対し、彼の歌は堅貞専一の愛情をたゞめる。白居易は自身と妻子との關係をもつて、自己の主張する先進理論を實踐した。彼と妻子は互ひに相敬愛し……」といふのである。

椿先生のこの論点は同じ材料を用ゐながら、私とは全く正反對であるので、ふしぎな感じがする。そこで以下に私の説をのべて批判を仰ぐこととしよう。

白居易の新婚はその三十六、七才の時、中国としては非常な晩婚である。妻は友だちのいとこで、白居易とは二十才近い年齢のちがひがあつた様子である。それにしても、新婚の詩のなんとお説教くさいこと。略した部分には良妻賢婦の例を多くあげ、みな貧に甘んじたことをいつてそのあと、ごらんのごく「お前も貧乏を承知してもらはなければ困る」といふのである。これがどうして愛情に対する先進的な見方なのだろう。大体この前年に彼は県尉といふから、地方官でも高官となり、結婚の年には翰林学士となつてゐる。前途洋々たるかいなかは知らず、新婚の妻に物質的に不自由をさす必要もないのである。しかし他のマンガリンとはちがつて、役得で私腹を肥したくない。それにはまづ新婚の中に妻の欲望に一本釘をさしておくのが第一だとは、どこかの国の戦後の役人諸君には必要なことだが、それにしてもなんと詩的でなくして現実的なことだろう。

私はここからはじめて椿先生もご存じの筈の、白居易の結婚前の長安の歌妓との恋愛を説いた。この歌妓に与へた作品には、絶対に貧に

耐へよとは説かないのである。それこそ現代の赤線反対論者の如く、廃業の後は施設でポタン付けをして、貧に耐へよといひさうなものなのに、別れを惜むことのみをいふ。

さて新婚後、何年かすると白居易は妾を貯へる。六十八才の時、中風になつて家から解雇した中で、名のわかつてゐるのが二人、その一人は若くて名残を惜むのがあまりに可哀さうであつたので、無用の長物として売りに出した馬とともに、一応家から出すのをとりやめた。無用の長物は実は馬だけにかゝるのではなく、妾にもかゝる形容詞なのである。

それにしても、馬とならべて妾を記すところに、どうして婦女に対する「非常に同情的」な態度が見出されやう。また妻子と互ひに相敬愛し、と椿先生はいはれるが、周知の通り、白居易は子なしである。もつとも幼くて死んだ子はあり、これを悼む詩は珍しく直情的で、中国には珍しいが、その母、少くとも五十八才の時に生れた阿崔の母は本妻楊氏の出ではないやうである。そんなわけで愛は子供に対する白居易の一方的な感情として、敬は妻の側からの一方的なものではなかつたかと思はれる。

作品にも妻に対する尊敬など一箇所も見られないが、以上にのべたやうな生活に妻の抗議反対もなかつた様子だから、最後は司法大臣の官につき、爵位ももつた、当時の東洋での一番の大詩人に対し、妻楊氏はあるひは尊敬してゐたかもしれない。いや白居易も内心はこの良妻を尊敬してゐたのだが、作品に表はすことは遠慮したのではないかといふ人があるかもしれない。

実は私もさういふ疑ひをもつので、これを東洋の愛情の表現の特徴とするした。妻や子に独立の人格をみとめず、自己の附屬物もしくは

派生物と考へ、これをほめ、たたへ、誇ることは、とりもなほさず自己の誇負である。これは東洋の道徳からいへば非礼である。謙虚であることを礼儀の要諦とする東洋人からは、なしてはならないことである。いつそ卑下して豚児といひ愚妻といふか、しからずば一家のことはなるべく述べないのが賢明である。だから白居易が妻を虐待し、侮蔑したといふ氣は毛頭ないが、椿先生のやうにほめる氣には、また毛頭ならない。

思へば私どもは明治以来、西洋文化を意識的にも無意識的にも、ずるぶんとりいれてゐる。そのくせ男子にとつては残存する東洋的要素が、いかに有利、有力と考へられることか。「女子供はだまつてゐろ」でだまらして来た結果は、われわれ東洋の男性には、憐むべきもの、可憐なものとしての女性は見出し得ても、尊敬すべき女性、すくなくとも対等の交際をなし得る女性を、家庭の内にも外にも見出し得なかつた。しかしいまや、はからずも才媛時代が到来して、われわれ才薄き男性はただ目をみはるのみである。歌壇でも晶子を継ぐ、いや先礼晶子をしのぐ才媛が多く見られる。この時に當つて、才薄き男性どもは、いままでの詩文の慣例をやぶつて、女性讚美、いな讚仰の詩文を書くべきであらう。外にモデルを求めると、おのが良妻を手ばなしでほめることからはじめるべきである。乞ふ腕より始めよ、といふ人があるかもしれないが、これがまた東洋的な発想であつて、西洋の文学上の見地からは、評論家はどんなに手きびしく批判し、どんなに高遠な理想を説いてもよいが、自らそれを実行する義務は絶対にない筈である。

以上、とりあへず夏休みの宿題の補充をしておいて、秋になればもつとよいことを書かしていただくこととする。

一月集 I

大和 昇

○ 姫山に登りて見れば街々の屋根さまざまに生活せりけり
白百合のほのかな香りに救はれてむし暑き午後静臥続くる
青空を真一文字に飛びかよふ燕の意志を持ちたしと思ふ日もあり
鮮らしき南天の実の一粒を掌に握りしめ初日の出まつ
ひとりのみさびしき病室にしみじみとどきし賀状をくり眺めをり
おのづから心より合ふ病む兄と火鉢を囲む元日の朝
昇り来る初日に淡く消えてゆく雪の水音を病床に聞きあつ
一輪の菊はコップに挿されあり目覚めし夜半をかすかに匂ひて

前田 善久

○ 夕月の影すでなく脱穀の深夜に及ぶ君も余念なき
ベン先の凍りて来れば夜を斯くもの書き続ける心にぶれり
天然のたくまぬもの一つにて氷模様の硝子にひかる
うた心呼ぶまで幾日か飯を炊き単調の中にある雪景色

堀川 雅堂

○ 小牡鹿は灼けつく如き臭体をもてあましてか泥水に伏し居り
鎮守社に隣れる兵舎にそびえたつ縞のタンクの異様な耀き
われもまた早く癒えむと卓にしぼる野菜ジュースをつくづくと見る

○ 笛の音を這ひつゝ胸はたかまりぬ蘭陵王の荒心湧く
大松明に澄みくる沈香の清かなり神幸進めば拍手の音(おん祭)
白砂に薦・素真名板の清々し包丁式まつ朱の宮居に
舞殿にたかまり進む長慶子曲に心弾みて拍子あはせつ(舞楽始)
朝々は妻が手馴れの一杯の野菜ジュースを楽しみに待つ

土岐 清二

○ 霧けぶる青田白鷺華と降り八王子郊外通勤バス行く
すゝき原何處までゆく青き限りあをきものわれを脅かす
ごうごうと暮るゝ秋なり溪深く覆ふ木々抽き逆ふ滝よ
黒東風の波なめらかにあゝついに一羽の鷗が死んでしまつた
家を崩すかたへに寄りてコスモスはやゝ伏しさまに美しく咲く
さりげなくスカート返へしゆく君は水田に映ゆる雲を追ひゆく
教員にきまりしわれは眠られぬ倅を思ひ眼瞑りて居む
ツルゲネフ読めばひそかに憂愁が場末の冬の汝に索がる
雪しまく丘の辺勤くよぎりゆく男が有りて帽子振りつゝ
しらじらと梅咲き居れば外に出てて緋鯉の口を覗く吾なり
荒東風の船溜りにてをこらは朝の煙草を深く喫みをり

岡本 保

○ おほかたは汚職の記事にあげ暮れしも宇宙時代は二年を迎ふ
空想が理想となりて現実に近づきており一九五八年
みごもりし妻を歸して年を越すさいはての町の夜のつめたさ
一片の布令に去りし為政者の意志甦える那覇のまぢまち
かげるふの如く来りて消え去りしあくがれがたゝよふ私の胸に

編集後記

△前川から「東京で雑誌をやつてくれないか」と頼まれたのは二月であつたが、十一月初旬の今日、ようやく編集後記を書く所まで漕ぎつけた。この間における幹事諸君の心労は小さなものではなかつた。今後とも総員の私心なき協力によつて雑誌を盛り立ててゆきたい。「日本歌人」もボヤボヤしているを退行する。ここで活を入れ直して、二十五年の歴史の上に新しい花を咲かすべきである。

(石川信夫)
△東京では、ずっと前から東京歌会を続けて来ましたが、近年に至つてとみに隆盛となり、会に集る人々の間に、雑誌を東京にうつして、前川先生の雑務をとり除き、先生は作歌に専念出来るやうに、また雑誌は益々発展出来るやうにしたいものであるといふ話合ひが行はれて来ました。それが先生の御希望ともよく合致したので、発行所の東京移転となつた次第です。
(古川政記)
△色々の経緯があつて東京発行の運びとなり私も片棒ならぬ八半棒位をかたがせて頂くことになりました。四十才の情熱をかけます。△会費のこと、締切日のこと、用紙統一(四

百字詰大判)のこと、どうか下段の規約どほりにお願い致します。反則が重なると思外の命取りになりますから、木石流に又杓子定規的にはからはせて頂くつもりです。御賢察よろしくお願ひ申上ます。
(宮崎智恵)

△「日本歌人」東上す。身近かに来られてみるとこれはエライことになつたと思ふ。私はもう十年以上も歌を発表してゐないが、実は一年に少くとも二百首は作つてゐる。口頭三転してそのまま忘れ去つたものを加へたら四、五百首に達するかも知れない。これで私は十分に楽しいのだ。もちろん邪道であるが、邪道といふものは由来楽しいものなのだ。しかし、その邪道ともうどやら決別しなければならぬらしい。
(中川忠夫)

△尚今度から次の如き編成によつて会務を処理してゆくことになつた。(○印は選者兼任)
主 幹 ○石川信夫
客 員 齋藤 史
常任委員 中川忠夫 ○古川政記

○堀内民一 ○前川 緑
片山恒美 宮崎智恵
東 博 堀内 董
大伴道子 横田利平
前登志夫(以上入会順)

規約抄

・日本歌人は前川佐美雄が主宰する。
・日本歌人は会員と同人と維持同人とから成り、会員は一ヶ月八十円、(誌代七十円を含む)同人は一ヶ月二百円、それぞれ六ヶ月以上を前納するものとする。維持同人は内の割合とする。
・投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず二十文字以内に楷書で原稿用紙に認める稿の末尾には住所氏名を明記すること。歌添削は十首まで二百円。但し返信用切手封皮同封のこと。
・問合せは往復ハガキ又は返信料同封のこと

日本歌人 (毎月一回二十日発行)

定価七十円・送料八円
昭和三十三年十二月十五日印刷
昭和三十三年十二月二十日発行
編輯人 石川 信夫
発行人 古川 政記
東京都北区東十条五ノ一五ノ九古川方
発行所 日本歌人発行所
振替六七一四五番
電話(初)七二三七番
奈良市坊屋敷町四一番地
日本歌人 社
前川 佐 美 雄
振替大阪四七六番

横田利平歌集 宙 祭

¥三〇〇円 千三三円
奈良市坊屋敷町四一
日本歌人 社
振替 大阪 四七二八

岡本太郎 日本再発見

¥四八〇円 千四〇円
東京都新宿区矢来町七一
新潮 社
振替 東京 八〇八

大伴道子歌集 明 窓

¥三五〇円 千四〇円
東京都北区東十条五ノ一五
日本歌人 発行所
振替 東京 六七一四五

中谷孝雄 日本女性史

¥二五〇円 千三二円
東京都中央区銀座東六丁目二
ダウ イ ッ ド 社
振替 東京 六三二四四

齊藤正二 現代芸術の精神

¥三九〇円 千四〇円
東京都千代田区神田神保町一ノ三
昭 森 社
振替 東京 四六九六

芳賀 檀 文学は何のために

実存の文学
¥二四〇円 千二四円
東京都新宿区赤城下町四六
理想 社
振替 東京 七八三〇三

日本歌人

前川佐美雄主宰

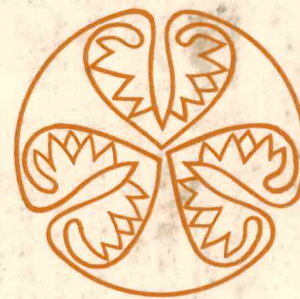


二月號

第十卷 第二号

昭和三十四年一月十五日印刷 日本歌人第十卷第二号 (通巻一六〇号)
昭和三十四年一月二十日発行 (毎月一回二十日発行)

昭和三十四年一月十五日印刷 日本歌人第十卷第二号 (通巻一六〇号)
昭和三十四年一月二十日発行 (毎月一回二十日発行)



結婚式
御披露宴
大小宴会は

是非御氣輕に
便利で静か
松平で

ホテル 松 平 東京新宿四谷

電話 (35) 1171~6 中央線信濃町下車三分



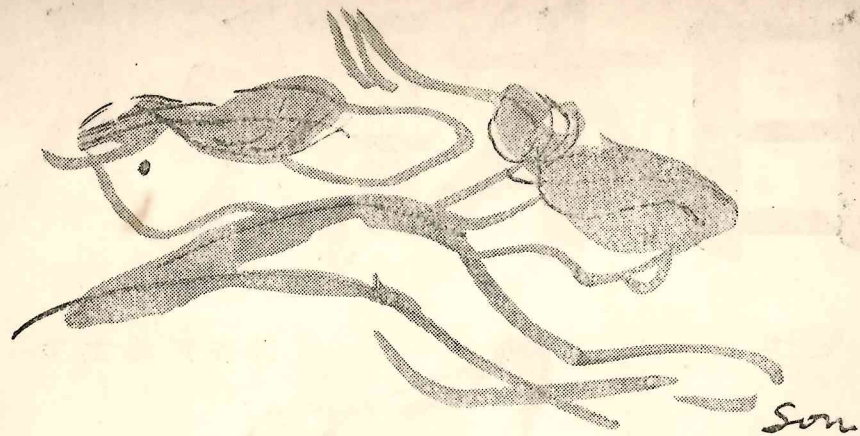
保谷
武蔵野

御婚禮に
御披露宴に
御商談に
御会食に
パーティーに
豪莊な風趣
お氣輕に
ご賞味頂ける

電話 (99) 7270 西武線保谷駅より三分

定価 八十円 (送料八円)





日 本 歌 人

1959年

2月号

日本歌人 二月号 目次

| | |
|----------|----------------------|
| 新人多し | 前川佐美雄 (3) |
| 作品 I | (4) |
| 作品 II | (11) |
| 胡瓜の歌 (詩) | 蔵原伸二郎 (18) |
| 立原道造の系図 | 田中克己 (19) |
| 相馬御風の手紙 | 堀内民一 (20) |
| 二月集 I | (22) |
| 予言者 (1) | K・ギブラン 石川信夫訳 (30) |
| 女流随筆集 | 片山・田垣・山中・大伴 (32) |
| 二月集 II | (36) |
| 歌壇時評 | 前 登志夫 (46) |
| 香風会詠草 | (48) |
| 編集後記 | 中川 忠夫他 (49) |

表紙・カット 井上三綱

新人多し

前川 佐美雄

歌壇は老衰してゐる、などとよく言はれるけれど、決してそんなことはない。一時よりはずつと若返つてゐるし、綜合雑誌などでは若い人々の活動は甚だ盛んである。新人がどしどし出て、何らかの形で新しさを寄与してゐる。それが果してすぐれてゐるか、又まともなものか、などといふことになる若干の問題はある。が、今は餘り小事にこだはらない方がよいだらう。十年一日のやうに、といふならまだしも、二十年三十年もの長い間、餘りパツとしない平凡な歌を詠みつづけてゐる中年以上老年の人々の歌にはうんざりする。技術は馳け出しの若ものよりは幾らか巧いかも知れないけれど、それとてさういふ平凡な歌に伴ふ平凡な技術であつて勿論大したことではない。かういふ歌人達と何十年間か対立し、衝突し、又、たたかつて来ただけに、昨今若い人々が威勢よく活動しはじめたのを見てたいへんすがすがしく、快く思つてゐるのである。

ただここで言つておきたいことは、日本の民主主義がみづからち取つたものでなく、外から与へられたのだ、と言はれると同じやうな事情が今日の歌壇にも見られるといふことである。そのことの説明はしなくてもよいし、又する暇もないが、今の若い人々は戦前の時代に比べるとじつに幸福だといふことをよく頭に入れておく必要がある。このやうに自由に活動が出来、何でもしたいことの出来る時代といふものは昔は夢にも考へられなかつたからである。それを思はずに「わが世来れり」といふやうなよい気になつて甘つたれてゐるはいけないのである。

若い人々の新しい歌にはよい面も沢山ある。しかし、かも、と思はれるものもやはりある。いろいろのものが入り交つてごちゃごちゃしてゐるから、よいものをそれとはつきり見きはめるのはなかなか骨である。即ち中年以上の、いはゆる老衰した歌人達の身上が思ひやられてならない。

胡瓜の歌

蔵原伸二郎

ああ おれは生胡瓜が喰いたい
 なまきうりが食いたい
 しめつて 暗い田舎の自然で
 山かぜに吹かれ
 にがい胡瓜が喰いたい
 にがい思想を 飲み込むように
 新せんで
 遠く 夕ぐれの中に
 小さな火山の火をば眺めて
 じつと みつめて
 生きうりの青い汁がのみたい
 あおくさい山の畑で
 ほうつと
 満開の梨の花に てらされ
 生胡瓜が喰いたい

おごりたる心の坩堝沸らせて幻想久し刻なほ過ぎず
煌きてまなこ眩ませし幻想のときれとぎれに霜ばしら踏む

吉田真津恵

むきく／＼にひび入りしなり風込みぬつひに碎けむおもひにて行く
 夫に従ひて来し辺土なり葛飾の野辺燃えくれば旅人のころろ
 わら／＼と吾子の鳩舞ふ空の彼方に少年の心を遂に逃しき
 わが愛でし葛飾の野も家居たち空をせばめて又われを追ふ
 真実一路少女糸がきししあはせは人形を抱きて見し空の青
 色褪せし身の塗り替へも難くして驚愕はしきりに鳴くなり
 こぼれ落ちしは無為のわが身の物にして今日も遍路のどと渴きけり
 たなごころ静にあげて縦横の不可思議なる線の迷路見てゐる

恩田恵美子

誰も彼もかへりみなけば悲しくて鉄と如露と花と吾る
 雑用に追ひ廻されし一日なり足にまつはる柴犬のなげき
 青き目の子等のつどひよ国々の微妙なる動きしるよしもなき

古谷久里

浅春の陽を背にうけてなほ深く無花果の枝をさしつぐ人は
 降りつきし春の畑は土ゆるみ土筆むら立つ生きもののいろに
 午前二時ひとりさめ居て白々と動かぬ蝶を闇にみつめ居き
 風をさまり雪に埋るる家となり桃園に仙女のあそぶ絵を見る
 明け近き寒夜をなきて猫ゆきぬほとほと太きあの黒猫ぞ
 他言にわれのすがたをきくものか雪の降る日の畑中にたち
 遠くここにわがひとり居て聞きあるを人もきくらんぼだい樹の歌

立原道造の系図

田中克己

昭和十八年の日記を見ると、秋も終りの十一月の五日に私は未知の女性の訪問を受けた。たゞし不意の訪問ではなく九月頃から来意は通じられてゐて、立原道造君の家系について、質疑のためといふのであつたが、私の都合でのぼし／＼してゐて、この日になつたのである。

女性は一葉姓をなりの、幕末の剣豪千葉周作の裔といつた。話は今ではよくおぼえてないが、母方が立原姓で、立原翠軒か杏所か、これもおぼえてゐないが、そのひとり娘の血をひいてをり、系図の写しも持参してをり、立原家の男系は杏所でされ、娘のあとには私の母方以外にはないから、道造君が翠軒の血をひいてゐることはあり得ないといふのだつたと思ふ。

私は立原君自身からその系譜をきいたおぼへはない。たゞ彼の死後「四季」の追悼号を見ると、神保光太郎君の編んだ略伝があつて「父は千葉県の農家の出であり、立原家に入った人であり、母はその祖をかの有名人水戸の儒者立原翠軒並びにその子画家立原杏所に

系いでゐる。現立原家の家紋は水戸家よりの捍領の紋である由」と書かれた箇所をおぼえてゐて、私の「始皇帝の末裔」（「楊貴妃とクレオパトラ」所収）といふ文中に、「大日本史」の監修者としての翠軒の名をあげ、これが立原道造君の先祖であることをのべたので、千葉嬢はこれに抗議に見えたのである。嬢の顔も、もうよくおぼえてゐないがほつそりと青かつた立原君とは全く反対の、いかに血縁の全くなさうな型だつたとおもふ。

私はこの会見を当時立教大学内の引揚げた宜教師の邸にあつた、これも今はつづれた亜細亜文化研究所の研究室で行つて、学者らしく、御教示ありがたい、いづれよく調べた上、訂正すべきだつたら訂正するからといつて、同嬢を帰らした。

その後、あつといふまに戦争は最終段階に入り、「四季」は発行停止、世の中は立原君の系図どころではなくなつたのだが、私はこの前後、実は翠軒先生のことをどこかで見てゐて、先生が儒学者であり、「大日本史」といふ国体明徴の本山のやうな書物の編纂者でありながら、酒宴の席で興いたると、上着をぬぐ、すると下には目にもあざやかな長じぼんを着てゐて、これで踊れば満座を感心さす云々といふ箇所をよみ、この人なら立原君の先祖ぢやないと、もはや独りぎめにしてしまつてゐたのである。

こんなわけで私に立原道造君の系図を書かしたら、先祖は西洋人で母方だけは新古今集の撰者藤原定家、父はライナア・マリア・リルケ、兄は堀辰雄と正確に書ける筈だが、これもその後やつてゐない。立原君の死後二十年、私は無為にも老いたのである。

香風会詠草

石川信夫選

吹き向ふ風にいどみてさまよひぬせんすべも
なき心抱きて 大森 禧子
子の逝きて共に悲しき夫なればわれ装ひて優
しくあらむ 上原 寿子
ねころびて赤きリノゴにかぶりつく孤独のわ
れに甘きなくさめ 浜田智恵子
今宵また胸しめつけられて漬菜切る双音乱れ
て夫なき夕餉 平山 掬美
かさこそと落葉ふみしめ訪ひし友の住居は夕
の日の中 秋葉 ふじ
いづれかの譲歩望むは無理なるか評ふ二人我
が妻と母 井上 正
夕されば潮とよする人波にゆきてかへらぬ夫
を待つかな 村口 照子
朝寒に窓あけたればみはるかす家並白く霜お
きてぬぬ
夫逝きて二十五年の歳月は短かかりけり子等

は東立ちぬ 杉山 信子
白き箱の弟の遺骨胸に抱きうつむきて夫は冷
雨を歩む 豊田智恵子
暮れなづむ師走の街にひと待てば赤き気球の
二つうかべり 藤原よし子
黒土をもたげて芽ぶく水仙にこもれる生のた
くましき思ふ 村上かつ江
とこしへに生きる命を底に秘めて緑たたる
蕨沼のかげ 小野沢邦代
石の像洗ひておがむ人のありその像うつすと
つ国の入 宮家 薫子
時ふればみのる実もあらむあだ花よ風にも霜
にも枯るるな我が恋 石岡とも恵
先生にみ教へ受くる日のありて拙き歌をはげ
まむと思ふ 山口よつ子
年かさね世の片隅に追ひやられずなほに我は
歌にすがらむ 津島佐久良
呼吸とめ耐へる母の背に赤くもえしもぐさ
もつひにくるすむ 近藤 誠治
鈴虫の声にさそはれ出て見れば秋風あびし夕
やみの庭 森 鶴子
この国にとき時来らし儲の皇子の妃いでまし
月の照りわたる 平山 一磨
皇太子意志つらぬかれ妃の宮をえらび給ひぬ
こころほのほの 星野外喜子

美しき処女と結びしプリンスの国の象徴のか
がやきて見ゆ 草沢 敦子
皇族は恋ひし給はぬものとのみ思ひ来しわれ
は愚かなりけり 中村 亮一
ながめぬ霜月になり庭の柿友と色めて味ひ
にけり 坂本木ノ枝
山の端に夕日かたむき歎かじと思へど煩にこ
ぼるる花びら 茂呂 月子
愛憎の幾山河をまぶたにぬらし友よぶ吾子の
生涯の宴 高野三津保
外国のフィルムに女に通ひたる少年の日のわ
が恋かなし 隅田 卓也
さんぬる日代々木の森に奉仕せしつるねのひ
びき今はむなしも 田中 誠

×

昨年十一月、西武百貨店リーディング・ル
ームで四回に亘り石川先生の講義を受講した
グループで香風会を結び、十二月十日西武綜
合学院において第一回の歌会を開きました。

右はその詠草です。
会の名は先生の命名、李白の句「密葉歌鳥
を隠し、香風美人を留む」からとられたもの
の由です。(幹事A記)

編集後記

△経営、編集の実務を担当してゐる石川さん
古川さん、宮崎さんなどの苦勞は大変なもの
だ。事情がゆるせば僕も少しはお役に立ちた
いのだが、今のところなはい、ただけでもし
ば徹夜しなければならぬやうな有様で、編
集会議に出席して野次馬をつとめるのがやつ
となのでどうにもならない。暇のある人はあ
ないだらうが、ない暇を捻出して少しでも手
伝つてやらうという篤志家がゐたら是非力を
貸していただきたいと思ふ。(中川忠夫)

本歌人への声援が発行所宛に届いて来る。ま
た会員の方々から色々のお便りがありますの
でなるべく御返事を申し上げるようにつとめ
ておりますが、忙しさにまぎれてついそのま
まになることがあるので大変恐縮です。しか
し大切なことは承知して下さるので御了承願
います。今月より会費の集りも大部よくなつ
て来ましたが、基礎は確固たるものですか
ら どんどんお送り下さい。(古川政記)

て病床生活をしてられる方の意外に多いの
にびつくりしました。寒さもあとひと月ほど
どうぞ御大切に御快癒を祈ります。私の住む
武蔵野市もやつと霜柱から開放され、黒土と
緑とがあざやかにになりました。(宮崎智恵)

△始めから終りまで歌ばかりでも単調なので
今度は詩を二つおせした。僕の訳したギブラン
はレバノンの哲人でパリに学びアメリカで本
を書いた人。この詩は彼自ら英語で書いたも
のから訳した。アメリカでは二十年間売れ続
けている不思議な詩だとされている。蔵原さ
んのは新作をお願いしたが間に合わなかつた
ので「乾いた道」の中から僕の最も愛誦する
一ぺんを拝借させて頂いた。(石川信夫)

日本歌人 月刊短歌雑誌

主宰・前川佐美雄
主幹・石川信夫

常任幹事

中川忠夫・古川政記○・堀内民一○
片山恒美・前川 緑○・宮崎智恵
東 博・堀内 薫 ・大伴道子
横田利平・前登志夫 (○は選者)
客員・斎藤 史

会員規約抄

- 日本歌人は前川佐美雄が主宰する
●日本歌人は会員と同人と維持同人
から成る。会員は1ヶ月80円、(誌
代70円を含む)同人は1ヶ月200円
それぞれ3ヶ月以上を前納するもの
とする。維持同人は内規による
●投稿歌数は十首前後とする。但し
一首を必ず27字以内に楷書で原稿
用紙に認めること。歌稿の末尾に
は住所氏名を明記すること。
●添削は十首まで200円。但し返信
用切手封皮同封のこと。
●問合せは往復ハガキ又は返信料同
封のこと。

日本歌人 第十卷 第二号
定価 80円 下 8円

昭和34年 1月15日印刷
昭和34年 1月20日発行
編集人・石川 信 夫
発行人・古川 政 記
発行所 東京都北区東十条5ノ15ノ9
日本歌人 発行 所
電話 011 7 2 3 7 番
振替 東京 6 7 1 4 5 番
印刷所 東京都豊島区池袋2ノ931
白 馬 印 刷 所
電話 071 0 0 6 8 番
本 社 良 市 坊 屋 敷 人 41 社
振 替 大 阪 4 7 2 8 7

日本歌人

前川佐美雄主宰

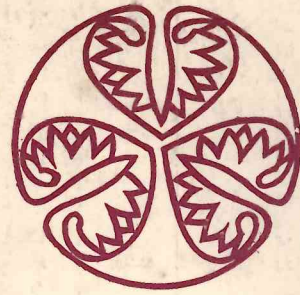


八月號

第十卷 第八号

昭和三十四年八月十五日印刷 日本歌人第十卷第八号 昭和三十四年七月三十日 第三種郵便物認可
昭和三十四年八月二十日発行 (毎月一回二十日発行) (通巻一六六号)

昭和三十四年八月十五日印刷 日本歌人第十卷第八号 昭和三十四年七月三十日 第三種郵便物認可
昭和三十四年八月二十日発行 (毎月一回二十日発行) (通巻一六六号)



結婚式
御披露宴
大小宴會は

是非御氣輕に
便利で静か
松平で

ホテル 松 平 東京新宿四谷

電話 (35) 1171~6

中央線信濃町下車三分



保谷
武蔵野

御婚禮に
御披露宴に
御商談に
御会食に
パーティに
豪莊な風趣
お氣輕に
ご賞味頂ける

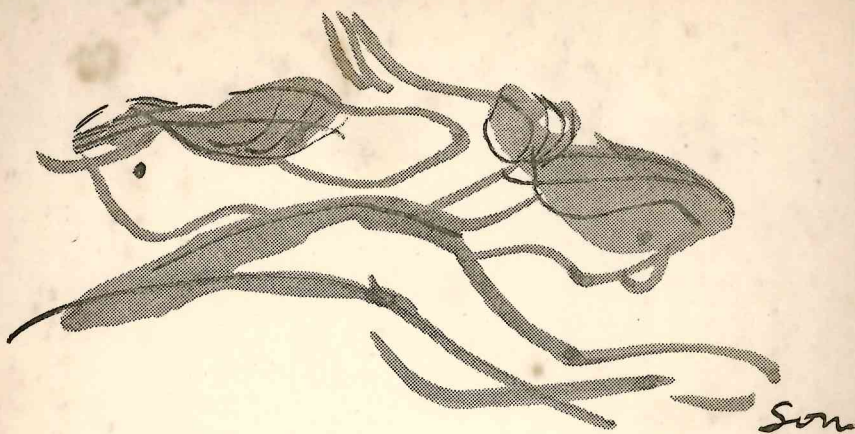
電話 (99) 7270 西武線保谷駅より三分

定価 八十円 (送料八円)



日本歌人

1959年
8月号



「作歌八十二年」を読んで

佐佐木信綱先生は、今年六月三日米寿を迎えられた。その祝賀会が六月七日熱海観光会館で開かれた。この米寿を記念して刊行せられたのが『作歌八十二年』（毎日新聞社）である。

『作歌八十二年』と題されたのは、その「はしがき」に「六歳で歌を詠んで、今年八十八歳。ただ一すじに歌の道歩んで来た自分である。『作歌八十二年』の自らのあとをかえりみて、ここにこの一卷をしるすことにした。」と述べられてゐるとはりである。

曾て先生は、「若しこの世にもう一度生れることが出来るならば、やはり歌人になりたい。」といふ意味のことを言はれたことがある。二十歳を越えたばかりの私は、先生の執心には感銘しても、それを素直に首肯することが出来なかつた。若気の至りで少々生意気だつたからにもよるが、又、先生とは世代を異にし、思想が違つてゐたからにもよる。しかし先生は純粹にさう思つてゐられたやうである。

米寿を迎へられた先生は、今でもやはり同じやうに思はれてゐるのであらうか。それよりは先生のこの言葉

を聞いたら、今日の若い人々はどういふ風に思ふのであらうか。それよりは先生のこの言葉歌を作りながら歌を軽蔑してゐる人がある。肚の底はさうでないのかも知れないが、物を言へば口先はすぐ

に歌を軽蔑する。軽蔑したやうなことを言ふことによつて、半面自分の何かを誇示しようとするのである。じつに奇怪な態度である。醜悪目をおぼはしめるものさへあるが、それが現代だと言ひ、短歌のせみだと言つて短歌や現代に罪をなすりつけてゐる。卑怯とも何とも言ひやうがない。

佐佐木先生の『作歌八十二年』を読んで、私は色々に感ずるところがあつた。今の歌壇は先生からすればだいたいやや孫に相当する人達によつて形成されてゐる。先生はそれをどういふ風に見てをられるか。それよりは今の歌壇の人達は先生の『作歌八十二年』を改めてよく考へてみるべきだ。何よりも歌に対する先生の生き方を知らなければならぬ。

前川 佐美雄

日本歌人 八月号 目次

| | |
|-------------------|------------|
| 「作歌八十二年」を読んで…………… | 前川佐美雄 (3) |
| 作品 I…………… | (4) |
| 作品 II…………… | (9) |
| 前川佐美雄歌集解説…………… | 亀井勝一郎 (14) |
| 八月集 I…………… | (17) |
| 八月集 II…………… | (23) |
| 歌集「明窓」評…………… | (32) |
| 浅野 晃・伊藤佐喜雄・生方たつゑ | |
| 加藤 将之・木村 捨録・蔵原伸二郎 | |
| 栗原 潔子・齊藤 正二・佐佐木治綱 | |
| 鈴木 俊子・田中 克巳・中田 忠夫 | |
| 長沢 美津・中野 菊夫・芳賀 檀 | |
| 中谷 孝雄・古川 政記・堀内 薫 | |
| 堀内 民一・前川 緑・宮崎 智恵 | |
| 今 東光…………… | (56) |
| 「明窓」出版記念会…………… | (56) |
| 歌会報告…………… | (59) |
| 奈良便り…………… | 前川佐美雄 (60) |
| 後記…………… | 古川・阿里 (63) |

表紙・カット 井上三綱

歌集「明窓」評

「明窓」雑感

浅野 晃

裏山の松吹く風にうちまじり闇につかれしふくろふのこゑ
すなほでよい歌である。

美しき月の桂かわが倚れる幻の木か匂へるものを
この歌も夢のはかなさが漂ってゐてよい。

語るよりまさると思へ虫のやうに静かにうすき翅をたためり
虫の翅のイメージがたいへん美しい。けれども調子にくらか難
がある。

現実によび戻されてさむざむと四条の橋の灯に見入りつつ
これといつて見所のある歌ではないが、十分に同感できる。

胸を染め野を染め山をそめてゆく春とは何の色といふべき
よい歌であると思つた。

秋立ちぬ濃きむらさきの朝顔に胸毛を散らす家鳩のむれ
集中で私のいちばん好きな歌はこの一首であつた。申し分なく生

ふと、いはゆる「組織と人間」小説を読む時のしんどさに似てゐる。ああいふ小説は言葉に色気がないから、読んでゐてしんどいのである。いはゆる私小説にも、うんざりはするけれど、大体かういふ小説は人間の色気をふりまいてはじめて成立する文学だから、やはりどこか面白いのである。色気といふのは、ここでは煩惱のことだと思つてもらつてもよい。

しかし、こんど改めて読んでみると、大伴さんの歌にもかなり色気があることがわかつた。昭和三十一年の「人間像」そのほか、わが子を歌つた一連などが特にさうである。私たちはああいふ歌を読んで始めて、作者に口説かれたやうな気分になつてしまふ。これはこちらの気分が通俗で、感情が甘いのではなくて、おたがひ煩惱に身を灼いてゐるといふ認識が、文学を成立させるだじな契機の一つであるから、その認識がそのまま読者のものになりさへすれば、それでその文学はすぐれてゐるといふことなのである。

大伴さんといふ歌人は、本来さかんに色気（つまり煩惱）をまきちらすべきところを、作歌の呪術によつてむしろそれを放下しようとして、中世人のやうなむずかしい努力をされてゐるやうだ。

明窓の目

生方たつ系

現代の奇妙な無風地帯を見つけて、そこで仮眠をむさぼることは

きてゐる歌だ。

林よりくるしみ重ね来し人のやすらぎのごとく月のほりいづ
いくらかたどどしいうらみはあるが、この歌も悪くない。

婦恋の牧場に群る牛の背に尻りをおきて過ぐる夏雲
この歌もよい出来である。

いづこにもやる方なくて一本の茎にもえ立つ耕のひがんばな
この歌もなかなかよい。調子もよく張って居り、姿にも無理がな
い。

われを日々失ふ時に鳴り出づる久しき過去の鐘の音なり
モチーフはよく分るが、まだ物足りない。

風いでて帆の舟うかぶ湖の景われはいづれの舟に居るならむ
この歌もまだ硬い。惜しい作である。

「明窓」を読んで

伊藤 佐喜雄

この歌集は、読んでゐて、しんどいところがある。小説の方で言

いたってやさしいことにちがひありません。それほど現代という時
間は目まぐるしい混乱をつづけ、しかも混乱に堵けるように生きな
がら、その裏に意外におびただしい無風地帯が淀んでいることを私
たちは知つてゐる筈であります。

明窓はそれらの無風地帯を蹴つてうたれた潔よい歌集です。こ
の歌集の魅力は、自らの生存への危機意識にゆすぶられながら、充
分に耐えてゆこうとする、生の抵抗からうまれてきていることを見
のがしてはならないと思ひます。

まさびしき火を見つつわが寄らざりき炎ほのほのみだれを懼れしもの
か

真実をみたさむ瓶は空のまましんと蒼き色にしづめる
侵されて居し静謐に怒りつつ眠りてし夜のながき暗がり

明窓の著者は聡い目を見ひらき、その目はきびしく外界にそそが
れると同時に、それはふかく自らの内部へのメスとして、するどく
反転して切りさく勁さをもつています。めぐまれすぎた環境が、か
えてって作者を孤独におしやるむごさも、矢張り作者自身であること
を私は知ることが出来ました。

凜とした中に、抑えがたい炎えるるつぼをかかえ、常に生きる危
機を知つたこの明窓の作者に、ながく、そして熱い期待をかけてゆ
きたい、その期待が失望することのないことも信じてゆけると、私
はこのように考えてをります。

歌集明窓の像

加藤将之

作者の名がわからなくても、はあ、これはあの人の作だな、とわかるまでになってみたい。前川佐美雄の歌などとなると、そこがわかるのだからうらやましい。大伴道子さんをよく存じあげないのだが、先日出版記念会にお招きを受けていろいろ伺つてみると、この人も、ちよつと特別な存在だと認識したことである。

そこで改めて一巻をよみ返してみると、歌集「明窓」のもつてい一つの世界というものをわかつて来た。この作者でなくてはならぬ一つの行き方、一つの世界が築かれかかっているのである。この形なき像の各部分として、よくまとまって一首一首が存在している、或は、各首が全体にはまり込んでいたといった具合に見える。せつかに言えば、なる程この人の歌はこの人のものなのである——それは、全部ではなくても、部分的には、うらやましいこと次第ではある。

列なして雁がねわたるわがゆめのかくのごとくも遠き秋空
人を離れ世を離れ泣きにゆくものか癒しもあへぬ想ひを山に
すでに速く地上開花の季をもたず退りてゆけば身は澄みゆくか
何ひとついさぎよきものなき今の日本の土に生ふる青竹

「明窓」を読む

木村捨録

大伴道子さんの歌集「明窓」には意欲の到りついた精進が見られます。書名からうけた最初の感じでは、中年婦人の感傷的な習作くらいに考えていたのですが、一読して閨秀歌人としての情熱と意欲をもった人間臭の感じられる歌集であることが判りました。

美しき色とりどりに薔薇咲けばわれの懷疑もなかばうすれぬ
吹く笛も秋の白さにこだまして柿の落葉のくれなゐにおつ

これらは自然を観照しながらの作ですが、この程度の歌は全篇に容易に見出されます。対象に対しつねに自分を没入することなしに或る距離をおいてうつくしくさばっている手法は、恐らく著者の人となりから来るものでしょうが、女流の思索的な境地として共鳴できるものであります。また次のような

今もなほ残響ふかく耳にありわれ遠くより花を見て居ぬ
たち消えし炭のごとくもひそやかに終りを閉づるものすがし

あがらざる気球のごとく無為にして人辞し去りしあとのこたは

現実生活をうたっている、物事をあらわに表現する以前に、裡にあたため、かつ醸して始めて撰ばれた言葉にゆだねるという態度も、声調のやわらかさを愛好してやまないわれわれにとって捨てがたいものです。

今にして何を泣くらむはじめよりこの激流に立たしめしもの
とりどりに、作者というものがよく出ている、その主観も、生活感情も観照態度までも、よく出している。それらは必ずしもすばらしいものとはばかりは言えないが、作者の立場は出されている。そういう作者の歌として、ほん物だと思われるのである。

この世界は、比較は少し大袈裟すぎるかとも思うが、今、机上にある「リルケ詩集」の中の拾いよみの所感ともつながってくる。

「明窓」一巻は、この詩人が詩をかいている態度とかなり近似しているように見えてくる。リルケは「後期詩集」に、ドライにうたっている。

「外にはもろもろの世界」 (星野慎一訳)

外には、風、挨拶、願望、飛行、

優越、詐欺——

けれども 内界には 花咲く充足と

名状しがたい脈絡。

失礼かも知れぬが、「大伴さんの御家庭の外には」と、この詩のあたりにくつつけてみると、どういう事になるのであろうか——恐らくそれは、作者の立場のそのものズバリではないのから。不当、不幸などは別にして、ここに「明窓」の像をほのかに私は認めている。

ぼくは昨年外国に遊んだような関係から、海外における作品を注意して見ているのですが、西欧にゆかれたという大伴さんの外地詠をまだ多く読んでいません。恐らく次回歌集には掲げられるのでしよう。

ところでこれは注文の一つですが、奇抜とか、流行とか、特に鮮らしい素材、また変つた技巧といったものにこだわることをいいたばかり思いませんけれど、この「明窓」にいくらかでも、大伴さんらしい緻細な作品に交わり、幾分常識外れの、行儀を乱したものが交錯していたら更らにおもしろかったと思つたことでした。歌集全体がうつくしく、また温藉すぎるようです。勿論そういうことは言うべくして前後撞着しますが、必ずしも期待してわるい希望ではないと考えます。

心から楽しんで次の歌集を待っています。

宝石は支流に

蔵原伸二郎

歌集「明窓」の感想とこのことですが、私は今日迄、歌が好きで愛読していますが、批評などという事は、とうてい及びもつかないことなのです。自信のない事を書くのはまことに無責任なことですが、これは全くの素人の一読者の感想として、おきく流しを願います。

「明窓」に想う

栗原潔子

大伴道子夫人の歌集「明窓」を通読して、ときどきつき当る疑問をどういふ風に解決すべきか、考え考え読み進んで後記に至った時、やつと何かの手がかりを見つけたように思った。

著者は最初に、「私の歌もまた、悲しき玩具であり、人生に踏みのこして来た心の道標」であると言っている。「悲しき玩具」は啄木の遺した言葉をそのまま踏襲したもの、と思われるのは「私の歌もまた」という言葉から当然であるべき筈である。だが、私はここで何故か「ハテナ」と思っている。何となくここでは、その内包する意味がすこし違っているように思われたのである。

それはすぐ次の言葉で氷解した。著者は言っている。

「あきらかに、拒否の肩をあげて、木枯の野を見つめつづけ、美しきものを、求めつづけて来た私は、少しつよすぎたやうです」

「少しつよすぎたやうです」この反省をもつ、ということが、夫人が啄木であり得ないことをいかにもはっきりさせているからである。そこで私は、著者には断りなしに著者の言っている「悲しき玩具」の上にも一つ「美しき」という言葉を置いて解釈をし、通読して来た歌集「明窓」をもう一度考えてみた。

それならずこしも疑問はないのである。唯「美しき」という言葉にも、たくさんの解釈がつけられると思うが、この場合、ごく単純に通用する意味だけに止めておいてよい。このことは同じく著者の

先ず全体として感じたことは、この歌集の背後に小説的な因子が非常に強く存在しているということだ。それが全体の構成の仕方、作者のいう「人生における心の道標」という記録的な一面が強く打出されているように思います。しかもこの記録性のあり方に、いろいろな表現効果の問題があるように思われます。読者としての興味もこの何となく匂う記録性に引きずられて行くのですが、最後まで、記録性の本質が抽象的にまたは観念的に暗示されるだけで、発想の中心であるとおもわれるものが表現の結果としてはあいまいであるようです。甚だ失礼ですが「私は幸福だ」と作者が思い込んでいて「私は幸福だ」と表現されても、読者にはその幸福の実感が伝わって来ないわけです。そのような表現の上で、何となく逃げていると思わせるものが発想の本質に感じられるのは、これだけのすばらしい素質の作者としては、損ではないでしょうか。

そういう意味で、私には作者が善悪の彼岸に立つたと思われる自己を揚棄した作品に感嘆しました。

法師蟬いとしげく啼けば目ざめたりくるみ育てり日にかげりつ

鈴のごとくまろき実をつけ夏の日を胡桃は青くわが目にあれば山々の起伏の溪に忘れし光のごとくゆめは抱かるる

山径にもん白蝶を追ひてゆく山うどの芽を摘むわらべたち

右のほか私の感嘆した歌は多数ありますが、それらは何故かこの歌集の本流ではなく、支流にある宝玉のそればかりでした。しかもこれらは才一級の歌ではないでしょうか、いや詩ではないかと私は一人の素人として思つたのであります。

言葉に「歌にゆきつまると絵を描き」とある、その絵が二枚の原色版で挿入されているのを見ても、間違ひなく言えると思う。

ところで、「一首一首の歌としては、その「美しきもの」に裝飾されすぎ、すこし古い感じのするものがあるのは惜しい。私は

山に向ひて心安らぐかの山をいつか超えゆきわれをたづねむ
いくつかの反語を胸に用意して会ふかなしみよふしあはせなる
かなしみのゆく手に高く匂ひるて萬葉の花と見ゆるばかりに
すきとほり昇華の時し至るなれわれはいかりの花束を投ぐ

こんな作品が好きである。一首目と二首目の沈潜したかなしみの咳き、三首目と四首目にみえる、爽やかに高揚した気持、どちらも著者の本質的なものを紛らはず表わしていると思う。

初心の美しさ

齊藤正二

私は、以前に前川佐美雄氏から大伴道子さんの名前と作品の紹介を受けてゐて、それで「静夜」といふ歌集も読んで、初ひ初ひしい味はひに感動したものでした。明星風の彼岸飛翔の想像的翼にも清潔な羽音が聴かれて、読みながらすがしさを覚えました。前川氏からお聴きした処では、大伴夫人の日常は多忙で作歌のために特に時間を慥へて費やす餘裕さへ無い由で、夫人は感興の湧く儘に執

務中でも食事中でも心覚えの記録を誌しておかれるといふ話でした。多くは車中で書き留められるものだろうといふ話も聞きました。私は此の話を聞いて、成程と腑に落ちる想ひがしました。

といふのは、大伴夫人の作品の底を一貫して流露してゐる生の律調は全く人工的な工みとは絶縁されてあるものであり、夫人の言葉を選ぼうとする際の行為はむしろ自然の動きを解き放たうとするものだ——といふことが、私なりに分るやうな気がするからです。歌集「明窓」が作者の「生」の意思を絶えず愛へていったと見る見方よりも、作者の「生」に関する思念に救ひを興へていったと見る見方は、私を私が執るのも、そのためです、本来詩は既に始まってゐるものの継続であつて、何か奇警な存在物を架設するものであってはならぬと考へる私は、今度の歌集に接する場合にも、大伴夫人が、「何を」「どのやうに」継続しようとしてゐるか、其れのみに関心を繫いだわけてした。そして、此の歌集の作者が日常茶飯の仕事に触発された或るとりともない一つの韻律を、如何にかして言葉として定著せしめようとしてゐるかといふ過程をじかに受取ることが出来ました。韻律を支へる実体は呼ぶならば作者の内側に発された或る情緒といふ風に呼んでも良いかも知れませんが、人間の情緒は原理的に不幸との対面に由つて生ずるものであつて其の限り幸福な情緒といふやうなものは概念的に矛盾だといふ前提を茲で忘却してはなりません。孰れにしても、最初に自己の裡に発されたとりとめない韻律なり情緒なりを大伴夫人が作品として徴表づけようとしたことは確かで、なまじひな歌人意識や芸術家気取りなしに、ひたすら自己の裡に既に始まったものを継続し且つこれに到達を与へたいといふ希ひからのみ制作行為を持続した功徳は、今度の歌集全

体を通じて認められねばならないと思ひます。私は、夫人の歌集を通じて再び「短歌とは何か」といふ重要な命題の周辺に迄到着するのでした。

短歌は、矢張り、でっ上げを許さぬ文学で、むしろ原初から言ひ盡くされてゐる一切に協調してゆく時に、不図天与の如くにして与へられるものではないでせうか。此の協調の仕方について、各作家の仕事の質や趣きが異ってくるだけだと思はれるのです。作品の出来如何が問はれるのも、実は此の協調の仕方如何に関するだけなのではないでせうか。斯かる短歌の本質性に不満を鳴らしたい人は少しも短歌に執する謂はれを有たぬのであるからさっさと不満の無い別ジャンルに移り行けばよい。然も短歌は自ら全能を宣言した例はないのであつて、如上の既に始まつた何物かへの協調を守り通してきたのでした。この事は伝統短歌が証し立ててくれてゐますが。

処で、大伴さんの歌集が一貫して短歌の本質を掴み得てゐるのに、其れ相応の理由が無くてはなりません。私は、大伴さんが日常多忙であるために、不図——それもほんのちよつとした機会に際してしか、歌を作ることが出来ない状況に偶々置かれてゐる事が、却つて此の作家をして短歌の本質といふ謂はば至難の会得を、餘儀ないかたちにもせよ果たさしめてゐるのではなかつたらうかと想つてもみまます。花許りあつて実の無い当今の芸術論議を遙かに離れた地劃でかかる「本物の」短歌が作られたことは、現代短歌と現代文学全体が陥つてゐる病患の療法を知るに充分役立つとも見ましたが。それにしても、劇務の渦裡に在る一人の人間が創作行為を持続するといふことは生易しいことではありません。而も大伴夫人が此の行為を一貫せしめてゐるといふ事、これは夫人に「初心」のひた

句ひなく声なきものは石に似て白磁の瓶とともにおくのみ
たち消えし炭のごとくもひそやかに終りを閉づるものすがし

さ

何事もなく冬陽照りあたたかく子がのり捨てし鞆轡ゆらく
自らの手にともしたる灯をかかげ親しめぬもの入るを拒めり
春日なか山のつつじに来て遊ぶ蟲を見て居ぬ寸時のしじまを
これらを見て、私は大伴夫人の発想が漸やく寄物陳思の方向に即いてゐることを知り、茲に挙げたものなど心にくい程の巧緻の趣きがあると思ひましたが。勿論数ある作品の中には近頃の女流歌人にも肖た主観の執拗な表現が残つてゐて、私は此の傾向に同じ難く感じました。併し夫人の成育史を辿れば分るやうに、夫人の歩む過程は客観志向ないし具象志向の過程で、茲にも「初心」の功徳を検証し得るやうに見ましたが。短歌の本質性を踏み外さない限り、作歌は奈辺に武を行つても宜いのでから、今後夫人がどのやうな志向を示し且つ踏んで行かれても差向へないわけですが、夫人の裡に既に始まつた具象的傾向は尊重すべきだと想ひました。具象性は何もアラギだけの傾向に限るものではなく、私どもは前川佐美雄氏の其の傾向の作品の裡に「写実の達人」を看てゐる程で、大伴夫人の「初心」が此の方で一層逞ましく達成をもたらす日を期待する想ひを強くしました。

鋭くゆらぐ心

佐佐木治綱

むきさが持続されて居る故と見ました。私は、世阿弥が謂つた「初心不可忘。時時初心不可忘。老後初心不可忘」(花鏡)といふ言葉
を想ひ浮かべてみるのでした。そしてこの「初心」の心構へこそが、大伴夫人の作品の風柄に一つの初ひしきを受肉して見せてゐるのだと思ひました。人柄の他に、これは態度の問題で、この態度あつて、読者に爽やかな感銘を授けるのだと思ひます。

次に、私が感銘を受けた作品を幾つか掲げてみますが。
亡びゆくいのちひとつの悲しみになづみてききぬ鼻のこゑ
ゆたかなる起伏をもてば山の夜にひとりをいねて飽くこと
もなし

青空のふかきかなしき閑けさに失ひしものかへりくるこゑ
白がねの穂を光りつつひとむらの萩にながる冷えし月光
ことなれる悲しみながら女身も支へ来りし重さとおもふ
この山の春のおそきにまよひつつ霧の中なるうぐひすの声
てのひらのはかなき小きき雛あられいとしきものを思ふ三月
シクラメンの葉を洗ひをれば生きもののいのちのこゑが胸に通
へり

あかしやの並木のみどり葉さやけてこぼれしものふと忘れ
たり

家鳩の七羽が雨に巣ごもれば誰にともしひとりのおもひ
秋立ちぬ濃きむらさきの朝顔に胸毛を散らす家鳩のむれ
銀いろに秋雨けむる日を濡れて見にゆかむとす萩枯るる丘
松籟の音ともわかずきこえ来る天のあなたのものの訪づれ
身にふかく歎きのこゑをしづめつつ花屋にゆけば野の花はなく
泉ありて手を濯がむとせし日より心すこしく鎮りはじむ

過日の盛大な「出版記念会」に於いて、私は、私なりに卒直に
「明窓」について観照を述べ、その優れた点を指摘したが、このた
び感想文の御依頼をうけ、再び書架より「明窓」を取り出して精読
した感じは、端的に言って、吉井勇氏の序歌の冒頭の作品に同感す
る処が多い。

うつし世に女と生れ道けはし君の歌見てふと思ふこと
なる吉井氏の作は、「ふと思ふこと」と叙してをられるけれども
それは多年おなじ道に精進された芸術家のするどい直感と言ひ得る
であろう。

吉井氏の作を借りて、抽象的に述べたけれども、大伴道子氏の作
品には、抒情・叙景を通じて、女性特有な複雑な心理がゆらぎ含ま
れてをり、それが「明窓」一巻のすぐれた特色を形成していると言
い得ると思ふ。

勿論、「明窓」がこうした傾向に偏した作品のみであるとも思わ
ない。
浅間嶺近くに遊ばれた一連「朝の光」(七三頁)——に含まれて
いる、

浅間晴れてしづかに煙ながれゆく山の秘めたるゆめゑがきつつ
などは、すがすがしい高原に在つて、対象に向つてロマンチック
な想いを述べた作と言えよう。

しかし「畫像」(八六頁——)中の、

泣きくれし心一途が描きつづく女童の像は母に似るまで

に於いては、上すべりな抒情と読者は観過することが出来ない。

そして此の作は、「月光」(三四頁——)に含まれている、
清冽にぬれてかげなすわが頬のにはふおもひはうつしもあへぬ

等の作と精神内容に於いて表裏一体となるものと観ることも出来る
と思う。

作者のこうした対象の写生のみでは満足しない心深い態度は
「虚実」(二〇〇頁——)中の、

人の世の虚実の相をみてしよりこの溪流の水のつめたさ
等に於いても、あきらかに感取出来る。

「懶り」(一六六頁——)中の、

ひたすらに愛しつづけて来しは何冬ばら描きて心はとほし
等に於いて、作者の心境は動揺をつづける。

そして巻末の「浅間」(二二五頁——)のなかの、

とび来たる黒き蝶ちひさく手にとまる敵意をしらぬ山の生きも
等に於いては、作者の気持は、やや落付きを得ておられたのではあ
るまいか。

個人の心持のダイナミックな動きを表現するのが近代詩歌の本質
の一つであろう。

作者は右のことを、その稟性によつて十分に行つておられる。

「明窓」については、なお表現手法の上で練達している点も挙げ
るべきである。

そして一面、所謂、創作技術の上から論じて、「明窓」は如上の
気持が露わであり過ぎるとの評も出るかも知れない。

しかし、要は本質的なものであり、作者は詩歌創作に十分な資質
を本巻によつて示されている。

今後の展開を、同じ道を往く者の一人として、深く期待し、樂し
みにしつつ蕪雑な小文の筆を擱く。

ないことを思はせられた。

いかりを

田中克己

著者とは東京の歌会でたびたびお目にかかつてをり、いつも静か
にはほゑんでおいでであった。席上で見せられる歌も旅の歌で、静
かな風景をおうたひのものが多くと思つてゐた。しかし「明窓」を
いただいて、私はひもどいてゆくうち、目をみはった。

この過誤の来りし歴史うらむとも裂けたる土の帰ることなし
何ひとついさぎよきものなき今の日本の土に生ふる青竹

昭和三十年の作である。この年、作者に何があったのだらう。何
もなかったにちがひない。さうだとすれば、このきびしい歌は作者
のふだんの感懐にちがひない。かう思つて見ると、さりげない風景
の歌にも、いかりと悲しみの情があふれてゐるやうに思へる。青竹
と同じく山川草木みな、「いさぎよくない日本」の対照としてうた
はれてゐるのである。私はこの目をこは、と思ふ。さういふ意味の
ことを、にぎやかだった出版記念会の席で申しあげたかったが、う
まく申せなかつた。この文章でも同じことだらう。しかし私はこ
の歌集をいただいから畏敬の目で著者を見ることをおぼえた。そ
んな本はめったにあるものではない。さうしてかういふ意義がなけ
れば、本など出すべきものではないと思ふ。その意味で「明窓」の

「明窓」覚え書

鈴鹿俊子

花びらのひとつが水に落ちしごとわが浮びる渦のさ中に
魔術師のごとくおかれしかたはらの黒きレースの薄き手袋
目の隅をものかげ移りゆきにけり身うごきもせぬ秋風の部屋
ぎよととするやうな作品、女の妖的なものをそと見せられたや
うな感じである。もう一人の自分の内部を冷静にみつめることの出
来る作品だ。例へばゴッホが自画像を何十枚も書いたやうに。

いと高きあきらめの道端正にわが装ひし一夜なりけり

久しかる心の衣装ととのへて須臾にしてわが化身はなやぐ

塔高く空に光れり疑問符を書きつづけたる眸に光りつづ

嬌窓の牧場に群るる牛の背に尻りをおきて過ぐる夏雲

ひたすらに矜を正してわがゆけば春の砂塵もかりそめならず

作者のロマンが高く鳴り響いたやうな作品で、新しさとか古さと
かを越えたよい歌であると思ふ。それから四九頁「秋雨」一連のや
うなのは作者の若い時の調子が弱つてゐるのであらうか古い。又作
者のかなしみや歎きとは如何なるものであらうか、ヴェールに被は
れた感があるのも作者の個性であらうか、その答のやうな「人間へ
ば女のもてるかなしみと言ふより外に説明もなし」といふのがあつ
たが、とは言つても、すぐれた作品のある歌集であり、作者の凡で

出版をありがたいことだったと私は思つてゐる。

「明窓」における孤独について

汝は海に住むごとく孤独に住みき。而して海
は汝を運び去りぬ。△ツアラトウストラV

中川忠夫

孤独と沈黙

「明窓」の歌人は孤独の歌人である。それは詩の正統を歩むものだ
といへる。なぜならば、詩とは本来自身自身に話しかけることだか
らである。孤独なるがゆゑに沈黙となる。「明窓」は孤独と沈黙の
歌集である。しかもそれは激情の歌集でもあるのだ。いや激情がこ
の歌人を孤独と沈黙に閉ぢ込めたのである。たぎる激情のおそろし
さからこの歌人は口をつぐんでしまったのであらう。

したがって、この沈黙の歌人ほど、たえまなく激しい叫びを叫ん
でゐる歌人はない、自分自身にむかつて、また、人間の言葉の通じ
ない人間ならぬものに向つて、別の言葉でいへば、人間の言葉の通
じないもののみが、この歌人の激しい叫びを理解しようといふこと
でもある。

山に登りまことを言はむ空とほくひびかふ言葉のひとつを言は
む

すなわち、そのただひとつの言葉の激しさが、この歌人をして人

間にむかって言ふことを拒否せしめてゐるのだ。言ふべきことあまりにも多く、その言葉のあまりにも激越であるとき、人は言はない。

語るよりまさると思へ虫のやうに静かにうすき翅をたためり
言はないだけではない。つひにうすい翅までたたんでしまふのだ。うすい翅、それは強くはばたけば、裂けてしまふかも知れないこの歌人の心そのものである。

「内部」なる虚空

たたまれた翅は、ときに自分自身の内に向つてひらかれる。封ぜられたる激情は自分自身に向つて叩きつけられる。

激情は或日ひそかに封ぜられしげき今日の時きざむなり
聴覚は破壊されて居ればひたすらに内部にまなこは見ひらきつづく

うちにまなこを見ひらきつづける時、人は不可避免的に隠遁する。ここでこの歌人の分裂が来る。家庭人であり人妻でありそして社会人であるその肉体と隠遁者であるその心とに。だがもとより肉体は心にあこがれ、心は肉体にひかれる。

山に向ひて心安らぐかの山をいつか超えゆきわれをたづねむ
この歌人において「内部」とはなんであらうか。心の内部でもあるが、肉体の内部である方が、はるかに深く大きい。もちろん物理的には、肉体の内部は一粒の小空間にすぎないが、そこに虚空の無限があることはこの歌人ならずとも経験してゐるところであらう。限りなく深く、限りなく純粋なる虚空。山があり、星があり、蒼穹のある虚空。

一枚の枯葉のごとくかそけくもわれの終りを清しくはせむ
たち消えし炭のごとくにひそやかに終りを閉づるものすがし

ここでもまた「一枚の枯葉」は、この歌人の外なる現実の枯葉であると共に、この歌人自身でもあるやうに、「たち消えし炭」も現実の炭であると共にこの歌人自身でもあるのだ。それにしても、ここにおける「すがしき」は、さとりであらうか、あきらめであらうか。さとりといふよりも、あきらめといふよりもそれはむしろ祈りである。

激情の祈りを「内部」なる無限の虚空に向つて祈りつづける。そこに「明窓」における孤独の姿がある、「いのり」は人間の言葉のはじまりであり、詩歌のおこりであつた。そしてそれは、本来孤独なる人間の切ない言葉である。

我は我みづからの光の中に生く。我は我より発したる光焰を
再び我みづからに吸収す√ツアラトウストラ

百日紅の一途さ

長 沢 美 津

春の日の言葉は花にあづけたれ古き垣根によりて見る夢
一本の松とおもへばそれ自身風雪に耐へてゆく世と知りぬ
僻村の炉端にいつかうたたねの心の上につもる深雪

もし、心と肉体との分裂がなく、人体から分裂した心がその肉体の内部をのぞきみるのでなかったならば、この無限の虚空を内部にもつことはできなかったのであらう。

内部に虚空を湛へるがゆゑに、「明窓」にあっては内が外であり外が内である。主体と客体とは、そこでは対立して在るものではなくしてただ一つのものとして在るのである。

激情のいのり

いつかわれ声たてて物を言ふ日あれくるしきしじまの苔寺の庭
この歌人の沈黙の本質はおそらくここにあらう。「声たてて」も
のを言はないのは、「声たてて」いふことの空しきがゆゑであり、
みづからの内に向つて叫び、自分自身に話しかけるのに「声」をた
てる必要はないからである。かくてこの歌人は、白磁の瓶のように
声なき言葉を話して冷たくしづかに澄んで来る。

匂ひなく声なきものは石に似て白磁の瓶とおもにおくのみ

「白磁の瓶」はこの歌人の外にある物体の瓶ではなくして、この歌人みづからなのだ。「白磁の瓶」ともにおく。「匂ひなき声なきもの」がこの歌人自身だとすれば、白磁の瓶はこの歌人自身ではありえないといふのはロジックに過ぎない。「匂ひなく声なきもの」がこの歌人であり、また白磁の瓶がこの歌人であるのだ。ここでもう一度、肉体と心との分裂にたちもどれば、「匂ひなく声なきもの」はこの歌人の心であり「白磁の瓶」は肉体である。どちらもこの歌人自身であると同時に、どちらもこの歌人自身ではないのだ。

孤独に対する、この歌人のあこがれは沈潜してつひに孤独への讃歌となる。

風よりも雨よりもなほ避けがたくわざはひは来ぬ愛にそむきて
山に向ひて心安らぐかの山をいつか超えゆきわれをたづねむ
今日の日が明けし光を見さだめて毀れた木馬も廻さねばならぬ
掃り路はひとりと知れば心せくさくらの花もふふみそめたれ
明窓一卷を一気に読んで抜き出した歌であつてみんなそれぞれに
よい。この中から一首と取り出してみてもよい。一首にしてすぐれて
いれば歌としては全うなものである。どの歌も滋味があふれ人間の
瞬時のかなしみもこまれてゐる。

歌は一人称の文学であるから自分自身のことをいえばよい。その点この作者は徹底して自分のことをいっている。問題はその自分が
どれだけ拡がりどれだけ共感性を持つつかにある。

この作者のなかにしまつてあるものは、長い年月ある憂愁を、人
知れず執着として抱いて来たその陰影を胸深く持っているというよ
うなもので、それを片方の扉だけ開いてちらちらと歌にして見せ
る。あるときは片方の扉を開けてときどき絵として繰りひろげる。
というようなゆき方である。

水の純度をイオンでたかめ味も香もなき純粋にうんじはじめぬ
面白い歌である。作者の持つ素質と特質がからんで身動きがとれ
なくなつた感がある。

倦んじはじめのちにどうなるのであらうか。要なき虚飾、純粹
というも真の美を追求する者には果して純度のみ高くてよいのか。

ここにこの作者のつきあたらねばならぬ大切なものがある。ここ
で一步をすすめようとしているのを見なければならぬ。

歌にあつて意図なき世界を表出する力量があるならばそれだけで
非常に高く、大きなものになるのに、かつては凡ての意図を排した

苦の隠者風の歌のなかにも無意識の優越感に支配されているものが生じかねなかつた。また近代は高踏的な型で逃避の要素を歌の中に投げこんだりした。

何かに縛られることはこの作者が最も嫌うところであるらしい。この作者の底に流れているものに初念を詞にうつすに透徹した感受の強さで引きずってゆく傾向が一方的に解決をはやめさすようなところが生ずる恐れがある。

この次は縛られることを嫌うことから解放されて真に自由になつて詠んでほしい。

何ものか凝りかたまりてあふれたれ叫びに似たる声のゆらぎよ
百日紅一途に夏を咲きつづけましがひのなき花の色せり

このような歌には感覚に密着してよどみなくやや偏頗のようで本然さを失わぬよさがある。感情の興奮を補うに実感が沈んでくると
き歌がふかまるであらう。

「明窓」をよみながら

中野菊夫

「明窓」の著者は、絵を描き、歌を作っている。私は自分も絵を描くので、この作者の作品には関心をよせていた。二葉の口絵を拝見しただけから申せば、私の方が少しばかり絵は年期を入れていると思つた。

表面華麗な作品の多い今日の歌づくりの中では、正直な作品だといふことが出来る。私は右のような作がすきた。

「明窓」の巻末は「浅間」一連で終っているが、この一連にはあまり感心しなかつた。ただ、対称を一心に詠おうとしている態度には賛成した。ことに

子を産みて山に朽ちゆくいきものの仕合せをこはしてはならぬ
と思ふ

このような態度には全く同感である。同感であるけれど、作品としてみた場合には、疑問をもつ。作歌の態度に共鳴することは、そのまゝ出来上つた作品そのものまでもたええるわけにはいかないのだ。しかし、今日の作品には、作者の作歌態度の鮮明でないものがあまりにも多いので、この作者のこのような態度は、むしろたたえられていいのかも知れない。

今年も、もう、この著者は浅間の見える山荘にいつているかも知れない。私もこの間久々にグリーンホテルから中野井沢へ下つてきたら、道がすっかり立派になつていられるにおどろいた。今年で、あの草軽電鉄も半分ほどはなくなるといふけれど、大伴道子さんが、北軽井沢あたりの作品をもつと沢山作つてくれることを願つてい

歌人の道（大伴道子氏の歌集に）

芳賀 檀

私は美術学校へ入る以前から歌をつくっていたから、三十年ばかり前から作歌されていたという大伴道子さんと、その点でも同じようなものだと思う。前著「静夜」の中にも中野井沢の作品が何首かつて記憶にのこっていた。雷鳴を歌ったところなど、歌そのものは忘れたが、作者の感慨は妙に心に残つて忘れられなかつた。

今度の「明窓」では

魔術師のごとくおかれしかたはらの黒きレースの薄き手袋
手を握るいくたりの人の眸のうちにわれの見知るかなしみや
ある

妻の日を祝ふことなくすがし星輝きてわが四十七

というような作品をぬいてくると、うわべだけの、きれいごとではないところで作歌しようとしていることがよくわかる。はじめから叩いてやろうとしてみれば、中には熟していない作品も大分あるけれど、私はこの人の作品の一種の熱っぽさと、捨身に共鳴する。

私は、この著者の娘さんだという人の著書をよんでいないので、どのような目で母である大伴道子さんを描いたかは知らない、しかし、「明窓」の中には「青き光」としてその娘を歌つた作がある。スカラベの歌がそれである。

この作者は、内にたやすく人をゆるさぬものをもっているようにみえる。

自らの手にともしたる灯をかがけ親しめぬもの入るを拒めり

妻うれて黄にそまりゆく沃野にて昨日は言はぬもののためらひ
このような作品をみると、かなりにきびしいものといふことが出来る。こうした作品は、みずからを、相当におしつめてゆかなければ出来ないから、小手先の芸当ではないこともはっきりしている。

才二歌集のお祝ひの集ひの席で始めて私は大伴道子といふ歌人に御目にかかれた。いつか「静夜」をよみ、こういふ方だらうと思つてゐたのが余りびつたりしてゐたので一驚した。古典的で静かで美しい人であつた。かういふ歌人は前川佐美雄氏の「日本歌人」に於いてだけ可能な詩のあり方である。而もきびしく、なほ清らかで激しいものすらかくされてゐた。併しかういふ人間批評は歌人自身にとつて迷惑であるかも知れない。

実は歌集をよむまでは大伴さんの様な恵まれた環境にある人は幸福すぎて、ただ物のすさびに歌など遊ばすのだらう。花や小鳥を歌つて、それが詩として何で悪からう。純粹な詩として美としてそれだけでも充分ではないかと思つてゐた。が「歌集」をよみ、この人は美以上の運命に生きる人であり激しく異常な日を生きてさへ来たことを知つて意外であり、別の空間が開かれた様な気がした。

異常な、惨落の日を欺かれ、打たれ、傷き、悲しみなどいふものではない言語に絶したものとさへ体験した魂がここにも脈打つてゐる。(あなたも知つてゐた)と信じ難く世に交り難い私などふとこの人の手を心の中でとりたくなつたりするのである。而もそれは「美」故の「業」であるかも知れない。美といふものの負ひ切れぬ重大な問題や苦しみが重なり合ふさまじい日を私どもは撰んだものである。——他の生き方もあつたらうに、重大な苦しみを歌人も撰ばれたのである。なぜならば今日の多くの芸術はもつと他の安易な、官能的な、或ひは娯乐的な道もあつた筈だからだ。又さういふ要素がこの歌人に欠けてゐる事をむしろ指摘する人もあるかも知れない。今日は真の美を清らかな魂などをもう愛してはゐないし、むしろ美を墮し辱しめ、娯楽とすることに専念しいはば芸術の地位

がすっかり変つてしまつたからである。と云つて、他にどうするところができよう。それ故にこそ私はこの美のための「逆流」を、愛するのである。全て今日の芸術を肯定し、それを真の芸術と思ふことは全てを錯覚することであり、陥せいである。今日の芸術を否定し反逆するときに、はじめて戦後の今日の意味があり、参考とすべきだと思ふ。歌集の中から言葉拾へば正しくもそれは「美の叛逆」である。いみじいその美の叛逆のためにこの歌集を私はかみしめ、美故に堪へねばならぬ苦しみに汗を握るのである、而し歌人はみごとくに堪へ、その魂の強靱さを異常な健康さをさへ示した。その故に歌人自身苦しむことの運命を自覚し、又この様にして苦しむことこそむしろ「幸福」といふものの底であつたと知つてゐるのである。そしてさういふ「一筋の道」は何物にも代へがたく強大であり、「女」がつくるものであるばかりではなく、曾て全ての芸術の天才が歩いてきた道であつた。私の心にはこのか細い強さが必み通る様に思はれ、奥深い森に歩み入つた様な安らかさと慰さめとを得た。「短歌」といふものは人間の進歩を、——私は決して合理主義的社会的な進歩を云つてゐるのではない、——心情の進歩を歌ふ所に意味があると思つてゐる。もしこの歌人がほんたうにこれから度しいわびしい生の中にも愉しみを見出してゆかれるならば——一層深いものがにじみ出てくるのではないか、と思はれる。

「明窓」について

しかし、現実的には不可能なところに、女人としての苦惱があり自然への帰依があり、虚無の世界と、人間の孤独への眼が開かれ、悲歌的な斜面を調べる女人の歌となる。

女性の苦惱は、一人の母の苦惱としてもあらわれるが、万人の女人としての苦惱、時代の母としての苦惱にまで及んでゐる。

おそれあれば名乗りはあげず美しく家蓄の鍵もつ手みつむる
仕合せを祈り来し子も世に背き隸属の位置なほ占むるもの
流されてそのまま流れゆきにけり苦衷に散りし花びら一つ
懐りともならぬ哀れは身のまわり百里の距離をもつ人等なる
われも一人の母なれば勁しひそかにも汝が清き血の懐りを言ふ
も

×
遠き日のわが悲しみの灯は消えずいのちをつぎて子につたはる
か
世の道のたしかならざる物の象おもひつつ子の背をみやる
限りある一生をここに耐へむとすかなしみあまた重ねたる土

×
意志つよき答をもてばためらはず女の道も示されてあれ
過去の河未来の河へ流れ継ぐいく十万の母の胸より
これらは女人の歌である。これらの歌は著者の本音の通う歌であ
る。よい歌もその中に多い。

自然への帰依を詠んでは、
水すまし精根つくしまはり居る野路の流れのひそかなる生き
家ぬちのをどめるをみていでし野に風は正しき方向指示す
消え残るあかねの空よ清潔に洗ひきよめし手をば与えむ

「明窓」を読んで感じたものは、才一に、著者のあこがれの心である。それは夢を夢みる魂といつてもよからう。

大伴さんの境遇や環境については、一応のことは知っているものの、立入つてのことはわからないまた知ろうとも思わない。しかしどのような境遇や環境などの外的条件によつても、歌びとの稟質というものを替へることはできないし、それを満足させることはできないといふことである。歌びとの本當の稟質は、だからあこがれと夢を夢みるものであつて、その人間を滅却しないかぎり、地上的現実においてはそのおもいは満たされることがなく、時間と衰亡がもたらす生命の質的変化のみが、それを満たしてくるものである。しかしその時、個体の夢も消滅する。

そのような魂の稟質はどこから湧いてくるか。もはやそれは人間の本質の解明に属することとなるが、窮極においては、人間の肉体と精神とが、どこからかで指し示す方向を、異にしてしまつたというジレンマに起因することのように思える。

著者の稟質は、悲しみと苦惱の方向にひらかれてゐるが、いわゆる、蝕まれた魂などから発する悲しみではない。実に美しく、やさしく、清純な薫りをもつてゐる。また著者の歌の中に表われる「蝕む」といふ表現の中には、強烈な性情が含まれてゐる。その性情は、つねに氷の理知に冷却されて、異様な金属の硬さをみせる。

強烈なる意志をもてれば一色の黒き羽毛を著てゐる鳥
作者の真実は、これらの稟質によつて追求される。
身をひとつなほ偽らで生くる地ののこされてある世を思ひつつ

自然は著者にとつて清らかで美しい。それは吉井勇の序歌に歌はれた、「大自然」というにはふさわしからぬ安らぎとなつかしさの世界である。

著者の虚無の世界は、世のわずらわしさをがらくたな秩序を捨てた安らぎの自然に通ずる。

いく度か崩れしものをうち建ててきてあとかたもなきわれの道
哀楽のはてにかきかむ澄みとほる深山かっこうの朝の遠音を
山に向ひて心安らぐかの山をいつか超えゆきわれをたづねむ
孤独の歌も多い。著者は独りであるときが最も清く、美しい、また輝かしい、こういう孤独の世界は、著者独自のものであるろう。

×
ここに在るはわれひとりなりかしこにも独りなる人のただ美しい。
満たさるる時一人なり見知らざる山の雲さへ輝きわたる
みどり濃き帳りを垂れてひとり寝るゆめには人の入るをゆるさ
ず

最後のごときは、孤独というよりも拒絶の想いである。孤独ならんがための拒絶、私は正教徒的な鋼鉄の意志を感じずにはいられない。
また一般に「明窓」一卷に流れる美しさ、清らかさ、やさしさは著者が過去の永い年月の間に培われて来た心の修練による制御の美しさであり、清らかさであり、やさしさである。夢もあこがれも、歌に現される場合、この制御のモラルによつて磨かれている。したがつて、溺れる人の美しさではなく、生命の豊富な開花でもない。さびしく理知の光によつて克服された、合金金属のキラキラした光りをする発想を感じる。

いのちつづく限りを青き空ありて澄みゆく日々悲しみまさる著者の歌の道は、人間の修練の道にもつながっているようにである。女人の美を枯木のように枯らして、寒空に立つ冬を表現するのはなからうか。

水洒れてゆめも色あせゆきにけりいのち溢れて居し時すぎてこゝに著者の求道の姿が暗示されているかのようである。

とにかく、盤石を敷きつめられたような環の下に身をおいて、限りないあこがれを抱き、夢を夢みつづけて、歌びとの稟質を貫き通すことのできるというのは、どのような強靱な性情によるものであろうか。再び言わない。

(その独特な表現の優麗さについては、他日に譲る)

歌集「明窓」の歌ごころ

堀内 薫

歌集「静夜」「明窓」の著者、大伴さんは今日まで一すじに歌を歌いつづけて来た。歌を通して思索し、歌を通して自己を見つめ、自己をあわれみ、自己をはげまし、さらには運命をきり開き、脱皮に脱皮をつづけている。歌でどうしてこういうことが出来るのであるらうか。大伴さんは「明窓」の後記で、「私の歌もまた、悲しき玩具であり、……」と述懐していられるが、石川啄木の場合とは歌に対する態度が非常にちがう。啄木は詩や小説に対しては全力的に、

相聞歌になっていると言うが、この作者も全様で、花や月を詠っても、結局自分自身を詠っている。自己の内面世界を詠っている。客観の事象をあまり詠まないから、歌の世界が狭い。その限られた狭い世界で、まるで虫のように一筋の細い声で歌いつづけている。結局、歌とはかかるものである。これこそ歌の本体なのであろう。

大伴さんの歌を詠むと、なんとなく式子内親王の歌の世界が思い浮かべられる。それは真実であること、歌に対して全力的、全人的であること、何を詠っても結局、作者自身を歌っていること等が似ているからである。内親王は御白河天皇の才三皇女で、選ばれて賀茂神社の齋院となられたが、病により退下、若くして御兄以仁王、円憲法親王たちの非業の最後にあわれ、御自身もまた、橘兼仲、僧観心らの陰謀事件に関係ある者との嫌疑をこうむられそのため、出家せられた。

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる跡もなき庭の浅茅にむすほほれ露のそこなる松虫のこゑ

これらの歌にも哀韻はどうであろうか。寂寥哀切の感を作らんとして故意に作ったのでは、これらの歌のような内部からしみ出る哀韻は出ないのである。この哀韻こそ本物なのである。「その色となく」とは、「特に何を見るとき特定の見るべき物が無い」とことで、この種の言葉、内容を用いた歌に有名な三夕の歌がある。

さびしさはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕ぐれ

寂蓮法師

杉や松のような常緑樹の生えている深山の秋の夕暮、特にこのために寂しいと言う原因になる物もない、全体的な淋しさを「その色としもなかりけり」と詠っている。三夕の歌中、最も深い把握の

全人間的にぶち当たって行つたが、歌に対しては、作者が歌よりも一段高い立場に立つて、余裕ある立場に立ち、自己の芸術的才能により思うままに作っている。歌とは全伴者の立場でなく、人形使いの人形におけるような関係である。人形を自由に踊らせて、笑わせたり、おどけさせたり、泣かせたりしている。歌により鞭うたれることはなく、むしろ歌に甘え、溺れ、淫している。生活短歌として、更には社会性短歌として優れているし、又短歌史的にも重大な役割を果しているのであるが、それとは別に、啄木のかゝる作歌態度では、短歌による自己の生長発展がない。現状よりの脱皮もなければ運命の克服も開拓もない。作者の生長のないところに真の意味に於いての歌の生長はない。啄木の歌はその最初と、最後とは余り変りはない。むしろ初めの方が純粹で熱意がこもっている。大伴さんにとっても最初は手なぐさみであり、逃避の具ともしたのであつたが歌に対する時は本当の自分に立ち帰り、おさな子の心になり、誰はばかることなく本音を吐いた。本音を吐いた故に慰められもし、心が軽くなつた。新しく生きる力を得たのであつた。大伴さんは多忙な生活に明け暮れていられたので、歌に精神を打ち込む時間的余裕がない。その為に即興的に作った詠み流しの歌も相当あつて、完成度と言う点からは不十分である。しかしその僅かの時間に於いて全力的に全人的に歌にぶち当たっている。才一歌集「静夜」ではむしろ力みすぎたぐらいである。真実で赤裸々であるが、その裸の皮まではぎ取って、血みどろの裸形を人に見せると言う有様でいたましかつた。この作者はそもその初めから飽く事なく自己を歌いつづけてきた。物に触れ事に当って、よくもこんなに自己の事ばかり詠って来た事かと驚くばかりである。真の相聞歌人は何を詠っても

歌とは思って感心するのであるが、新古今の美的理念として、寂寥感の歌を作り出そうとする唯美主義的意図が感ぜられる。

見わたせば花もみぢもなかりけり浦のたまやの秋の夕ぐれ

藤原定家朝臣

これは巧みな歌で、定家ならではの感嘆させられる。この歌には「浦の苦屋」と言う、見るべき特定物(寂寥感を与える具体的な物)があるので、「その色となく」とは詠めない。それで見るべき特定物があるが、世人の愛賞する艶美なるものの代表物である。「花もみぢもなかりけり」と全巧異曲の表現をしている。新古今時代は二つのイメージを重ねることによる造型方法として本歌取りが行われたのであるが、この「花もみぢもなかりけり」は本歌取りのイメージとして源氏の明石の巻の一節を取って来ている。この場合のイメージの構成は複雑であるが、又巧妙であるが、しよせん、これは無味枯淡な美的世界を人為的に作り上げた歌である。これに反して内親王の歌は、境涯の歌であると共に自己自身を詠んだ歌である。その病身、そのつめたい環境、さらには悲しい宿命が、この歌の哀韻の母体となっている。しのびやかな、ひえびえした、ものさびしい人柄、生活、思想が、この内面的な寂寥哀切の歌となつている。二首目の「露の底なる松虫の声」とは全く作者それ自身ではないか。偽装、歪曲、欺瞞を事とした新古今の中で、内親王もまたそれらの技巧的表現態度に強力に影響されたのであるが、その持ち前の真実は隠すことが出来ず、この粉飾された歌の底の底から、本音がうちふるいつつひびき出ている。内親王の歌には強度の彫琢が加えられているのであるが、彫琢の跡を止めず天衣無縫である。それに対して大伴さんの歌は、タッチが強く、デッサンが早くて清潔で、清楚

暢達の風がある。内親王とは性情も違ふし時代も違ふ。しかし前述のように、真実であること、自己を詠うことに於いて相似している。大伴さんの歌で意識して自己を歌っている歌は、多くは失敗している。寓意的に比喩的に、更には象徴的に表現した歌は非常に多いがよい歌も相当あるが、多くは底の浅い作となつてゐる。これに反し意識しない作に却つて作者の本音が出、作者の全人格、全生涯、全運命が歌われている。御鳥羽院御口伝に、内親王の歌を評して「齋院はことにもみもみとある様によまれき」とあるが、

ふり返り見る時空はあかあかと何に染みたるわがあつき胸

燃えつくし何の薪となるわれか曠野の中は遠く夕映え

この大伴さんの歌もまことにもみもみと歌われていて、声調まで新古今的である。

遠山の風ごうごうと鳴り来れば身は一握の灰燼に似る
ひんやりと熊ノ平の空気が肌にしみて来る窓のつゆ草の青
内親王の歌が内面的自己を詠っているように、これらの歌は大伴さんの精神的自画像である。ことに後の歌は、内親王の「露のそくなる松虫のこゑ」に自己を象徴しているように、大伴さんのすべてが詠われている。歌集「明窓」二巻の中で、私の特に愛唱するのは永遠の乙女心を、切ない女心を、絶えない女の願いを詠った次の様な歌である。

何事をここにかをるや手折り来し一枝のはなのかくにほひたつ
父母ありて涙もあまく花つぼみ美しき子はおさげ髪して
野の草につくしの萌えを見し日よりかなしみ胸に溢れてゆけり
かつてこの身の内過ぎしはずかずの切なくあつき人のためいき
美しき月の桂かわが倚れる幻の木か匂へるものを

たし、その詩情を何よりも大切にしたいと思つた。著者にはじめてお目にかゝつたのは、箱根芦の湖畔の夏行の際であつた。ちよつとあいさつをしただけであつたが、こんど歌集を丹念に読んでみて、その詩を形成するに至つた基督の若干にも触れることが出来、「明窓」の詩人と対談してゐる思ひに、この草稿を書いてゐる。生まれればかりの、ぬれた様な羽根をふるはせてゐる黒あげはの幻想が、しんとした紺碧の夏空を掠めて行く。きらきらとした、しかも大様な光りさまに羽根をあはした様な、しづかな詩情が、「明窓」の内部で息づいてゐるやうに思はれた。

何ひとついさぎよきものなき今の日本の土に生ふる青竹
遠き日のわが悲しみの灯は消えずいのちをつぎて子につたはるか
若かりし母の涙を汲みしゆゑ光求めて子はゆくならむ
ひと葉一葉かそけき音を立つるなり信濃の山のくれなるのはぜ
空晴れて山の姿の見え来ればふとわれの手のおきどころなし
細き手に支へて来たるもしびの自信のごとき緋の曼珠沙華
芽吹きたるは何の若芽か鮮らしく忘れしわれの窓に光りて
美しきひとの一生をおもふなり由比ヶ浜辺をたもとほりつつ
さくら花仕合せうすき妻の座に敷けとしきりに窓に散り来る
不用意に居りし時なり内部澄みて霧のやうにも湧きくる涙
ことさらに祝ぐこともなく忘らえしが生れ日は霜に冴えゆく
翡翠ひと指にささむと思ふなりその色に似るわが秋のゆめ
絹垣のしづかにゆれてわたらへり園にこゑなきかしは手のおと
秋雨の祇園の茶屋にそのかみの雑魚寝を語る妓の銀のおび
南座に晶子曼陀羅みる夕べ芸妓がかさず紺の蛇の目に

列なして雁がねわたるわがゆめのかくのごとくも遠き秋空
あきらかに空のいづことわかねどもかく美しき雪は生るる
荒筵敷きて寝るにも似たるかな子に別るとおもひ定めし日
シクラメンの葉を洗ひをれば生きもののいのちのこゑが胸に通
へり

家鳩の七羽が雨に巣ごもれば誰にとまなしひとりのおもひ
空澄めば言ふこと知らぬ鳥さへも羽毛豊かに身につけて棲む
空晴れて山の姿の見え来ればふとわれの手のおきどころなし
消え残るあかねの空よ清潔に洗ひきよめし手をば与へむ
一枚の枯葉のごとくかそけくもわれの終りを清くはせむ
身のよこれ洗ひきよめてゆくならむ杉の木立に雨の流るる
手の内に秘めて示さずこの光天にも地にも返さておかむ
情あらば花はやさしく匂ひたつわがくまぐまやしづころなし
子を産みて山に朽ちゆくいきもの仕合せをこはしてはならぬ
と思ふ

「明窓」の詩情

堀内民一

ゆたかな詩情と明敏な知性によつて支へられてゐる「明窓」は、大伴夫人の才二歌集である。読みかへし、よみつゞけて、愉しかつ

枯れおつる一葉のからさ手にもちて示すひとなき秋の夕ぐれ
はぢらひつその美しき火の鞠を海に投じぬ今日の落日
わだつみにいさなどりする海人が頭に神を忘れし死の灰降りて
おなじ程手にもちかねしかなしみよいたはり合ひて京の町ゆく
いのち細く今日生きてゆく哀しさよ夕街中を雨に濡れつつ
ふと晶子の詩情を思はせる浪曼悲哀の調べが、ある時は孤独の錐
をもみ込むごとく、あるときは、それかあらぬか銀笛哀慕の一ふし
が高く著者の胸底にひびくやうでもあつた。しかしいづれにしても
生得の詩の肌が、わけても好ましい悲哀にみちてゐると思はれた。
こゝにあげた二十首は、そのことをよく証してくれてゐる。唯美の
詩精神が、不思議な夢の環をいくつも持つてゐる。そして、そのこ
とが一ばん読む者の心を引くのである。翡翠の指輪に通ふ秋のゆめ
の想ひは、さりげない詠ひ振りだが、痛いほどにうけとれるし、幽
闇をわたる絹垣のゆれや、かしは手の音には、民族悠久の心象が、
このましく抒べられてゐる。京の諷詠からは、みやびを慕ひさまざ
まの夢を歌ひのこした晶子のおもかげが、この詩人を通して興味濃
く映つてくるのは、久しぶりに味はひ得た短歌の徳であつた。非常
にさびしい心をうたつてゐるのだが、よく考へてみるとその佛は、
遠い王朝の女流たちの中にあるやうな、じつにつよい、しかも自己
の詩を護りぬくといつた気概がわたしに伝はつてくるのだ。殊に落
日の莊嚴の美を詠じたこの一首などには、さながら新古今集の最有
能の女流のひとりを聯想することができる。あるひは松園女史が描
いた晩年の作品に漂ふ侵し難い天来のものを、じかにする感じが深
いのである。京の舞妓の銀のおびは、そのまゝ、この詩人がひさし
く育ててゐた才能の、ほのかなひらめきとも受けとれる。

はぢらひつその美しき火の鞠を海に投げぬ今日落日

「明窓」の中の絶唱だと思ふ。非常に唯美な詩感であるが、けんらん、豪華を通りぬけたしんじつ感が、きつしりと一首に装填されてゐるのに、今更のごとく感銘する。こんな美しいつゝましい自己の漂白歌が、いまの代にあることが、むしろ痛々しいと思ふ。女人の精がつぶさに胎生した一首であらうか。

しつとりとしたかなしみが、まるで街をつゝむ秋霧のやうに、著者の抒情にある。若き日の髪が、霧に自然にうるほふてゆくのにまかせると云つたところがあるのに心ひかれるのである。流露のかなしみであらうか。青竹に目をとめて、何ひとついさぎよきもののない日本を見つめる時、不意に羽ばたく詩を意識する。そしてはつとしてわが手のおきどころなしと詠嘆する作者である。

細き手に支へて来たるともしびの自信のごとき緋の曼珠沙華
芽吹ききたるは何の若芽か鮮らしく忘れしわれの窓に光りて

不用意に居りし時なり内部澄みて霧のやうにも湧きくる涙

「羞恥・同情・運命」の樹梢に見たニイチエの午前の微が、この詩人にもふさふさやうにも思ふ。「明窓」をよみながら、わたしは方丈記の一節を何げなく口ずさんだのである。

冬は雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

「明窓」を読む

前川 緑

て生きており、この世の如何なる人の境遇も、その人の精神に独特な仕方て役立つことの出来ないような境遇はない。といつた彼の詩人をおもつた。

生きもののかなしき眸色雑念にくづをれ易きわれを支ふる

人間のわざともあらぬ一日すぎむなしき空に浅間を眺む

星凍る夜空を香く仰ぎつゝパりに寝る子のゆめ思ひ居り

山うどの花は花火のむくろにて白くかそけく香もなく咲けり

渴きては独りの部屋にかへり来ぬ拒むものなき白き圈のうち

ここでは孤独にさいなまれないやしがたいところが歌われている。

白い圈のうちに沈潜した精神を、打ち込むときに作者の心を充たす歌が生れて来るであらう。その出来る人である。

「明窓」の著者

宮崎 智恵

ひたむきといふ言葉はこの人のためにあるかと思ふほどに大伴道子夫人はひたむきである、地球がしばらく運行を止めてくれたら、と掌て私に言はれたことがあるが、ふしぎに多忙な方でもある。

「静夜」も「明窓」もひたむきと多忙の中から生れた集のやうに思ふ。

夫人の歌の特徴はきりきりと甲はれたやうにきびしいものと決め

杖に倚れる祭主の宮の緋の袴たいまつ灯におんいたいたし

「明窓」を再読して右の一首に新しく心ひかれた。

これは御遷宮祭を詠んだ一聯の最後の歌であつて、「おんいたいたし」という作者の感動の意味を了解し、その美しさを納得することが出来た。

今年六月七日、光明皇后千二百年御遠忌の華嚴経講讀の日、東大寺に参詣せられた伊勢の祭主の宮を私はおしのびした。東大寺一山及び、各寺院の名のある僧正、尼僧が並び、誦経のつづく大仏殿のひろ庭の白砂の上を、杖をつかれた宮の御歩行を美しく思つた。山内の樹々の緑が透きとほる炎のようになした空に立つていた。

いつしかも生きむかなしみ手の荒れも誰につくさむ今日の真実
裏山の松吹く風のうちまじり闇につかれしふくろうのこゑ

つくろはず独りを居りぬ夜の月にいつはりなけむと思ふ時の間
どの歌も、心の底の愛しみを暗示しており、これは作者の本質のものであつて、その人がよくあらわれている。

おそひ来る身の寂しさをそのこととなくそらしつつ今日も生き
つぐ

いのち細く今日生きてゆく哀しき夕街中を雨に濡れつつ

オルゴールはじめてききぬわが家にかかる優しき時計ありしを
シクラメンの葉を洗ひをれば生きもののいのちのこゑが胸に通
へり

強い感性のリズムをもつて流れるその歌の調べは独得であつて、無限に続くものようである。このことは作者のすぐれた才能であり、「明窓」の特質でもある。けれど集中にまぎれるような小さなこれらの歌に、水のような寂寥が匂う。人はそれぞれの境遇を持つ

てゐる私は「明窓」の中から優婉な次の数首を見出した。

いのち細く人を想へりきさまるる時のごとくもひねもすひとり

重ねられし手のつめたさをばづしたりひらひら散りゆく葩うす

き

情あらば花はやさしく匂ひたつわがくまぐまやしづころなし

はぢらひつその美しき火の鞠を海に投げぬ今日落日

松の花ひしめく若き香にみちて春はくるしきいのち爛漫

「明窓」の出版記念会では、もつと色気のある歌を作つて下さいといふ声があつて、それが次々と祝福の言葉に伝染してしまつた形であつたが、色気といふことが、つややかといふやうな意味で言はれたことは勿論である。夫人のほんたうの作歌の心はここらにあるのではなからうか。つややかに美しくわかい歌である。

あけすけな私は、いつか夫人のことを電報のやうな電話をかける方と評したものであるが、歌集の中心をなしてゐるのはやはり非情とみえるまでに圧縮された口つきの歌である。

一寸ちの黒髪ほども解明の餘地なき時にきびすを返す
おどろかぬ無表情をば人言へりおどろきすぎし疲れは言はず
閉されし扉はかたく鍵もたぬ身がわだ中の魚の眸をもつ

きらきらと身がまへたやうなこれらの歌はまた静かなあきらめに

似た変貌もする。

空晴れて山の姿の見えくればふとわれの手のおきどころなし
語るよりまさると思へ虫のやうに静かにうすき翅をたためり
繋がれて智慧のかぎりを笑へどもかなしみは遂に流れてゆかず
いくたびか崩れしものをうち建ててさてあとかたもなきわれの

道

鶯のこゑにさそはれ思ひ入る物のはじめの狂ひしときを
また軽やかな次の作品から、大伴道子夫人をスカールレット・オハ
ラだと評されたご姉妹の評言を思ひ出した。

ぼつかりと泰山木の花咲けり口をつぐみて居むと思ふ日に
山うどの花は花火のむくろにて白くかそけく香もなく咲けり
並木茶屋あぢさゐの花さはに植う水色の精の棲める家らし
これらの作品を共通してゐるものは情熱を包んだ冷やかさである。
右にあげた数首はいづれも私の愛誦するものであるが、一面才能を
濫費されたやうな作もないではない。

あざやかに体を交してほほ多めり沈痛の眸は片づけられて
人間へば女のもてるかなしみと言ふより外に説明もなし
人によつては齒切れよく巧みな歌といふかも知れないが、私は何
かやり切りぬ思ひがする。火にも水にも飛びこめさうに類ひ稀な気
性の方であるから、ほんの少しの時間をあげて、はつとするやうな
味はひをさらに加へて頂きたいと思ふ。

「静夜」に題す

今 東 光

僕は散文的な人間のせいか歌がわからない。よく歌壇などの論争
を見ると、どうして三十一文字に関してあれほど論じ合はなければ
ならないかわからない。

また僕が惹きつけられた一首がある。それは

誰か世に悩みなき身のありやなしわが空しさの中にあるもの
といふのだ。かういふ心境は絶えず僕自身のものだ。かういふも
のが歌として謳はれるといふことは羨やましいことだ。僕は散文と
してしか書けないだけに、かういふ歌人を褒めたい。

未見の大伴道子女史の労作に敬意を表する。才二の歌集は何年後
のことであらう。期待する次才である。

△今東光氏に「明窓」の著者から批評をお願いしたら折返し
て早速と原稿を送って下さった。処が何としたことかお手許に
本がとどいてゐなかつたので、同じ著者の旧著「静夜」を批評
して下さった。受取ってちよつと驚いたが、考へてみると新し
い歌集に並べて古い集の批評を頂くといふことは願つてもない
ことであるし、多忙で有名な今氏がわざわざ書架を探して下さ
ったといふことは著者にとっての幸だと思つて原稿は大切にし
まつておいた。ここに掲載させて頂き粗忽をお詫びしておく。

「明窓」を読む

中 谷 孝 雄

「明窓」の読後感をひと口に要約すれば、清浄といふことに尽きる
のではないかと私は思ふ。私はこの清浄を限りなく尊ぶ。恐らく作
者は稀有のきびしさで現実の混濁を濫過し、この清浄を得たものに

しかしながら日本人である限り歌は好きだ。古来、歌の道は日本
人の心に通ふ路だと心得てゐる。従つて古の名歌がわかる程度に僕
もわかるのだ。

僕は伴道子女史の歌集「静夜」が実に二十五年の結晶によつて
出来たと知つて驚いた。吾々が文学の道に全生涯を賭してゐるだけ
に、この惨苦な路が如何に堪へ難いものであつたかわかるやうな気
がする。

彼女の歌集を拜見してゐると、それは歌であると共に、僕の文学
に一派通ずるものがある。彼女が歌ひ上げるものを、僕は散文で表
現するだけだ。

目を伏せて遠きを思ふいくたびか繰返し来しおのがおろかさ
これが歌の姿として好いとか悪いとかは知らない。けれどもかう
いふ懷述は世界の文学に通ずるものだ。ルソーの「懺悔録」を引き
合ひに出すまでもあるまい。吾々が綴る文章はいつも悔恨の念であ
り、懐旧の情であり、懺悔の叫びだ。

最近、来日したアンドレ・マルローは今日の時代は文学よりも政
治に関心を持つ時代だと言つた。それなればこそ文学者マルローは
ドゴール内閣につらなつてゐるのだらう。けれども僕は飽くまで反
対だ。僕自身、政治が嫌ひだから言ふのではない。文学者は政治に
指を染めてはならないのだ。何故なら政治は往々にして愚行と狂気
に通ずるからだ、芥川竜之介の「羅生門」の初版本に、愁ひを湛え
る蒼眼の漢詩の一句があつたやうに記憶してゐる。この蒼眼こそは
政治を憂ふる眼でなければならぬ。

細りゆくいのちおそれず眸を見れば青く澄みたり鏡の中に
彼女も亦それをお愛するのであらうか。

違ひないが、さういふことは実はわれわれ読者の問題ではなく、わ
れわれとしてはここに集められた歌を愛誦することによつて情を慰
め、心を洗へば足りるのである。まして私などは、歌人でもなけれ
ば歌学者でもなく、また歌の批評を職業とする者でもないのだから
尚更のことである。およそ論じたり評したりすることは、私の性の
能くするところでもなければ、また任でもないのである。

さういふ私が、「明窓」出版記念会の席上でいささか駄辯を弄し
過ぎたのは、あの会場に溢れた親和的空氣にそそのかされてのこと
であつたが、まことに汗顔の至りであつた。あの時の私の軽弾みな
言葉は、続いて起つた諸家の駁論によつて見事に粉碎されてしまつ
たことだから、私としてもいつそ救はれたやうなものである。

私は若年の頃から万葉、古今、新古今を座右の書として愛読し、
その中の多くの歌をそらんじてゐる。私は今でも毎日、どんな日でも、
それらの歌の一首や数首を思ひ浮かべない日はないが、それは
もう完全に作者からは離れ、私自身のものになり切つてゐるやうで
ある。いひかへれば、それらの歌は私の血肉にすつかり同化してし
まつてゐるのである。「明窓」に於いても私はさういふことが起る
ことを期待してゐる。私はこれまでに三度、一首残さず「明窓」を
通読した。そしてその後も折にふれて任意の頁を翻読してゐるが、
老来記憶力の衰へた私は、まだよくそらんじるまでには到つてゐな
い。しかし遠からずその中の何首かは完全に私の血肉に同化し、私
自身のものやうになり切るに違ひない。さうなれば私にとつて作
者などはどうでもよいことになる訳であるが、すべて芸術品の作者
とその享受者との関係は、さうなつてこそ最も理想的だといふべき
ではないだらうか。

「明窓」出版記念会

春を待つて日をのぼしてゐた大伴道子夫人の才二歌集「明窓」記念会は、四月十九日午後一時から東京の松平ホテルで開催された。とりどりの花に飾られたホールでは会はパーティー形式で進められた。古川政記氏司会、中川忠夫氏開会の辞、前川主宰の挨拶につづき来賓の方々の祝辞あり、花束贈呈のあと著者より御礼のことばを述べ、閉会の辞は石川信夫氏。

来賓会員六十余名出席、盛会であつた。著者より来賓諸氏に記念品を贈り、一同新緑句ふ庭園で満開のつつじを背景に写真を撮り一おう散会。そのあと著者をかこみ、日本間の晩餐会には二十四名出席、食事のあひまに短冊がまはされ、あとで著者に贈られた。噴水のむかふに著者を祝福したホテル心づくしの早い鯉のぼりが風をはらんでゐた。

記念会出席者

大伴道子、前川佐美雄、浅野晃、安藤寛、石黒清介、伊藤佐喜雄、生方たつゑ、小笠原文

夫、加藤克己、加藤将之、木村捨緑、蔵原伸二郎、栗原潔子、齊藤正二、齊藤節子、柳山潤、佐佐木治綱、鈴鹿俊子、田中克己、中谷孝雄、中野菊夫、長尾良、芳賀檀、柳沢彦三郎、吉田松四郎、吉村いと、荒木益江、有原まち子、安藤百合子、石川信夫、榎孝子、及川千代、岡松雄、大月恵以、梶原耕子、桑原一菊、倉敷美代子、佐藤のぶ、荏素彦、荏雪子、重森光子、高橋友子、高杉幸江、田中芳江、土屋忠司、豊木智恵子、中市弘、中川忠夫、名坂八千子、波木居澄子、福島緑、古川政記、三村信代、南満子、宮崎智恵、三好清明山下富子、吉田真津恵、横山憲一郎、綿津和枝

晩餐会出席者

浅野晃、伊藤佐喜雄、生方たつゑ、小笠原文夫、加藤克己、加藤将之、藤原伸二郎、栗原潔子、齊藤正二、饗庭節子、柳山潤、佐佐木治綱、鈴鹿俊子、田中克己、中谷孝雄、中野菊夫、長尾良、芳賀檀、柳沢彦三郎、石川信夫、古川政記、宮崎智恵、前川佐美雄、著者

なほ、来賓の祝辞を中川忠夫氏がメモしてをられたのを幸ひに、ここに掲載させて頂く。(宮崎智恵)

来賓の挨拶から

(中谷孝雄) きびしく拒絶してゐるやうなものが匂ひ出てゐる。ちよつと近より難いやうな感じがする。詩歌は多少、放蕩色好みでよいものだと思ふが、それが足りない。(浅野晃) 中谷君の説はセンスが荒つぽい。中谷君は好色系統の人間ではないかと思ふが、好色系統に属さなければならんといふ理由はない。

前の歌集よりも今度の方が幅が出て、落ちつきが出て来た。前の歌集よりも好きになれるやうな気がする。

(栗原潔子) 大伴さんは大変美しい方だが、お歌も非常に美しい。歌は美しくあるべきものだと思ふが、ただ、これは止つてゐる美しさだ。動的なものだつたらもつと素晴らしいと思ふ。

(田中克己) 女子教育何年目かにして気づいたことは、女は男よりも高級な動物だといふことである。

外面女菩薩内面女夜叉といふ言葉があるが才一歌集を拝見したとき大伴さんは非常におとなしい女菩薩だと思つた。ところが今度の「明窓」を拝見して夫人がこわく

なつた。女夜叉だと思つた。アメリカから帰つた文章を「日本歌人」に書いてをられるが、アメリカに対する不満をピタッとあげてゐる。これなども女夜叉なればだと思ふ。

(生方たつゑ) 著者は御自分自身をきびしく切り離してゐる。理的で、極めて平穩な生活の内部を切下げていく人間としての足掻きがある。キズのないところにキズをつけた、さういつたお歌だと思つた。

(伊藤佐喜雄) 中谷、田中と大体同じだが、これは小説の世界だと思ふ。大伴さんが小説を書いたら面白いのぢやないか。

(柳沢彦三郎) 日本歌人でいつとうろまい歌人だと思ふ。私には近づき難い。歌を詠む女の人は大体有閑夫人だが、男は生活に結びついて苦勞して作つてゐる。

先きほど好色になれといふ説が出たが、私は好色を好まない。好色的になることに賛成しない。

歌は自分自身を切りきざんでおくものである。言葉は自分のものになつてゐるが、多少妥協的なところがある。

(蔵原伸二郎) 拒絶しかたが未だ足りない。徹底的に拒絶すればもつと色気も甘さも出



て来るのではないか。

(中野菊夫) 軽井沢の歌がたくさんある、がやはりよい。

(神山潤) 女の人の日常生活がよく出てゐる。生活の暗渠みたいなものが出てゐる。大伴さんに色気は求めないが、もつと奔放自在であつていいと思ふ。

(佐佐木治綱) 大伴さんの個性がよく出てゐる。

(芳賀檀) 詩はたんに美しいだけのものではない。きびしくあることは日本歌人の伝統だ。きびしいといふことは大伴夫人が背後の美しい生活に甘へずに歌つてゐるといふことである。

(石黒清介) 巻頭の一首を朗詠。

(小笠原文夫) 才一歌集の序文で前にも「自分だけで楽しんでゐる」と書いてゐるが、歌はそれでいいと思ふ。

前の方はスバル的なのが多いが、昭和二十八年から三十一、二年作になるとまるで違つた感銘をうける。最近の作にいいものが多い。

(長尾良) よんでいくうちにシンの強さを感じず。最後までよんでいくと、この歌はこれだけでなく、もつとあたたかいはなやぎ

が欲しいといふやうな気がする。

(安藤寛) 前川君が大変きびしいオキテをもつてゐるやうで、日本歌人の歌は全部すばらしいが、仕合せな生活であるにもかかはらず、これだけ高いきびしい作品を生んでゐる。大伴夫人の天性がこれだけの作品をなさしめたものと思ふ。

(齊藤正二) ジャンルの混淆があるのではなからうか。新劇が面白くないのは、小説、映画、現代詩などの混淆があるからだが、短歌はうひうひしい声があればいいので、それ以上を求むべきではない。ふと心に浮んだ初々しい感じを止められてゐるものはいはりいい。キズつくのもいいが、キズつかずに初々しく歌へればいいと思ふ。ムキになつてむづかしくなる必要はない。三十年から三十一年の作品には感心した。

「木のかげに雨避けて立つこしほしいのちあるもの花とわれとのみ」といふ作品があるが、一瞬の心にわいたものを止めておく、これが短歌の在り方である。短歌ははかないものであるかも知れないが、そこに短歌のよさがある。

(文責在記者)

六月歌会報告

○京都歌会——十四日(日)京都駅前「銀閣」にて開かれた。最後までお待ちしたが前川先生はたうとお見え下さらなかつた。何か急なお差支があつたらしいがまことに残念であつた。そこで互に議論しあつて一首つづ丁寧に検討した。出席者は木股富子、松原活泉、奥春三、細川久子、弘光和子、常見静枝、山上伊豆母、橋本松三、上田喜子、北久仁格、石河輝子、釜田郁子らであつた。左に当日の高点歌三首を録しておく。(松原)

文鳥の足裏の体温ほのかにて疑はず掌の餌を啄ばむ 上川 こう

幻覚のつづきのごとし黄菖蒲がひらひらと咲く道に曲れば 弘光 和子

いたく小さき君の足と思ふぬき石の上

に足並べつづ 橋本 松三

帰りみち路次のあひより月を見て機織る者の喜怒を確かむ 松原 活泉

わけもなく声かけてみたき思ひせり氷果なめつつとほる少女に 奥 春三

16頁より続く(前川佐美雄歌集解説)

前川氏の歌風は、歌としてみればかなり窮窶な点もある。自分でそのやうなところへ自己を押しやつたとも言へる。独自の破調となつてあらはれざるをえなかつたほどの精神の流離が、背後にあつたといふことだ。実を言へば私は氏の歌に、必ずしも世の謂ふ歌を見てきたわけではなかつた。むしろ「文学」を見てきた。と言へば当然のことにはちがひないが、歌といふ形式を破りたくて仕方がないと言つた焦心の詩心、これが氏の歌の生命ではなからうか。逆に言ふならば、この短詩型のうちに、批評を盛りこもうとした一の先駆的営みがあるといふことだ。たとへば「徒然草」を短歌化する、さういふ予想と可能性を、氏の歌集は我々に暗示してゐるのである。

(角川文庫)

前川佐美雄歌集

亀井勝一郎解説
価 八〇円 千 八円

耐へられて言ひし言葉に自らを傷つけし夜の重き悲しき 細川 久子
遠い洋を見据ゑる瞳金色の体毛を持つせ独り午後の公園 山上伊豆母
わが話聞くこともなくたちまちに流れに向ひ石投げし少年 橋本 松三
黄にうるむ菜の花晶に砂煙上げ選挙の車騒がしく去る 上田 喜子

○歌塚・柿本寺見学歌会——二十一日(日)

大阪歌会と奈良歌会合同で、奈良県天理市櫛本に古くからある人麿の墓と稍せられる「歌塚」及び同じく人麿を本尊とする「柿本寺」を見学するため、この二つを主管する極楽寺に集合した。合憎天氣模様悪く、集る人は少

なかつたけれど、極楽寺に保管されてある人麿の木像や画像など、その他人麿に関する数多い古文書などを拝観することが出来た。それより極楽寺住職藤谷智守師及び同寺は関係深い池辺隆三郎氏の案内で朽ち果てた柿本寺にまゐり、ついで歌塚にまゐり更に和尚下神社にも参つた。かへりには在原業平の住居跡と称せられる業平屋敷に寄り業平神社にも参つた。荒廢目も当てられぬ有様であつた。極楽寺に戻つて歌会をする筈のところ時間がなくなつた。その上お寺の好意から夕食まで御馳

走になつた為、歌会はおきらめねばならなかつた。しかし人麿の塚、人麿の寺、それに業平神社に参詣出来たことは歌作の身にとつてこの上もない幸であつた。近く「柿本人麿顕彰会」が発足し、歌塚・柿本寺の復興整備がなされるといふことであり、つづいて業平屋敷・業平神社も同様復興整備せられるといふことである。その時期の一日も早からんことを祈りながら夕刻極楽寺を辞し去つた。当日の参会者は、前川先生、極楽寺藤谷智守師の他、池辺隆三郎、富田敦夫、松井敬子、奥野喜久代、北久仁格、山上伊豆母、島村新三、鍋木正雄、井手喜佐男、中井崇二、梅木春和、鍵岡正磯、同母堂、同子息、遠山満、和田嘉寿男、大宮兼守らであつた。(大宮)

○東京歌会——六月六日、前川先生を迎へて松平ホテルにて開かれた。出席者は、吉田真津恵、横山憲一郎、有原まち子、倉敷美代子、望月葉瑠、福島緑、南満子、浜本彩、波木居澄子、重森光子、阿里一多、新里牧外、豊田智恵子、東博、古川政記、江崎俊平、木村賢一郎、宮崎智恵、名坂八千子、三好清明、丸尾艶子、渡辺らであつた。歌会の後、別室での晩餐会は先生を中心に話がはずんだ。

(大岩)

受贈歌集紹介

歌集・黒薔薇・平田春一著 (東京都新宿区花園町六五・三友興業ビル五〇三号・八洲出版株式会社発行) 価・三〇〇円

著者は創作の同人。「黒薔薇」は著者の第三歌集で、「昭和三十一年の春から、同三十三年夏までの作品中より、二百九十五首を集録したもので」明朗闊達な詠風、平凡な事象の臚目録の中でくっつくのない感性と、恬淡、豪放、磊落の個性がみられ、何でも自由によりみ上げてる点などの特徴である。

歌集・相貌・早瀬譲著 (東京都新宿区花園町六五・三友興業ビル五〇三号・八洲出版株式会社発行)・三〇〇円

著者は橄欖の同人。「相貌」は「昭和二十八年以後の作品を自選して、三百余首」を集録したもの、きびしい現実と真剣に立ち向っている作歌態度に敬服するが、想がなまであつたり、概念的な歌以前の表現が処々にみられた。また、歌風が統一されていないようなところは、絶えまない作風の向上発展のあらわれかと思われて、むしろ好意を感じた。

歌集・楚歌・市来勉著 (東京都練馬区小竹町二六五五・橋短歌会発行) 価・一五〇円

町二六五五・橋短歌会発行) 価・一五〇円 著者は、現在歌誌「橋」の発行者で、楚歌の作品は、昭和三十三年五月より、同三十四年三月までのものを収めてある。 著者の、心の内外に亘って感慨や事象を平易にとりあげて明解に叙してある。従って内観の深まりや、芸として鍛練の冴えはみられな いけれども、現代に生きる人間のその日、その場の出来ごとや事象を、即物的にとりあげて、会社、工場、経済事情、国際関係など、広範囲な素材を読みあげているところに心ひかれた。と同時に、明解に現代的感情とマツチする表現の歯切れのよさも感じられた。 著者は、職場にあっては理事者の立場にたっているが一般の勤務者に対しても、自由な感情をもつて見ており、国際関係などに対しては、自由な、必然の方向をみているところ常識的ではあるが、現代感情の基底をなす著者のリベラリズムを賛賞したい。

歌集・新短歌集・一九五九年版・宮崎信義・京都市中京区西の京馬代町二二・新短歌社発行・価二五〇円

出詠者は、一五人、全部自由律短歌作者の作品を収めてある。戦前の一三三八年と今回一九五九年版との出詠作者数を比較してい

るが、一九三八年版では二四九人で、その約一割の二二二人が今回の歌集に参加しているという。

兎に角、自由律短歌は、昭和の初頭から「内容が形式を支配する。」という、プロ短歌の理論から導き出された国語歌の脈をひく短歌の実践であったが、やはり短歌は三十一音を基底とすして、歌うという、想や調べやことばや技巧をぬきにしてはならない。歌人が伝統と格闘して、今日に生きる短歌を作ろうとする苦行は、そこから出発しなくては意味がないようだ。自由律短歌は、むしろ「新短歌」といわずに、「短唱」あるいは「短詩」といった方が、その本質をよくあらわすようである。

夏野の道の長さは、影のない女のひとの歩きさるのに示されていた、児山敬一

冗漫な説明を感じる。もっとも、自由律の歌人は、新鮮な感覚や、発想もある。それにしても、歌がもともと歌うもの、歌はれる発想をこめていということが、第一ではあるまいか。

国学院短歌(年刊歌集第六輯) 国学院短歌研究会(東京都渋谷区若木町九) 国学院短歌研究会発行

編集後記

○伊吹山の夏行が終わったので、楽しみが一つなくなりました。何時もより盛大だったので、思い出しでも微笑がうかんでくる。

○発行所あて、会費を送って来られるときに は○○費何カ月分とはっきり書いて下さい。次第に異動があるので、維持同人か同人か会員かが不明であると、間違いがおこりやすいのでお願い致します。

(古川政記)

(阿里一多)

○八月号が遅れたのは編集担当の宮崎女史が夏行にゆく朝、東京駅で不慮の災厄にあわれたため、すべてが番狂わせになったのが原因であった。女史のその後の経過はどうやら悪い方向には進まなかった模様であるが、人間どういことがおこるか全くはかりがたい。人間力以上ということを考えないわけにはいかない。注意には限りのあることである。 なお、校正その他、編集上のこまかい雑務を西武婦人ホールの大岩文子さんが俊敏に手伝ってくださった。こんどの場合には大いに助かった。感謝の意を表する次第。

お知らせ

○日本歌人の原稿用紙が来ております。御入用の方は発行所までお申し越し下さい。送料共百五拾円です。

○原稿の切りは

十一月号 九月二十日
十二月号 十月二十日

○東京歌会 毎月第四日旺日 於西武百貨店婦人ホール

刊 月 日本歌人 短歌雑誌

主宰・前川佐美雄
会員規約抄

- 日本歌人は前川佐美雄が主宰する
- 日本歌人は会員と同人と維持同人から成る。会員は1ヶ月80円、同人は1ヶ月200円それぞれ3ヶ月以上を前納するものとする。維持同人は内規による。
- 投稿歌数は十首前後とする。但し一首を必ず27字以内に楷書で原稿用紙に認めること。歌稿の末尾には住所氏名を明記すること。
- 添削は十首まで200円。但し返信用切手封皮同封のこと。

日本歌人 第十卷 第八号
定価 80円 8円

昭和34年 8月15日印刷
昭和34年 8月20日発行

発行人・古川政記
日本歌人発行所
東京都北区東十条5ノ15ノ9
電話(03)7237番
振替東京67145番
日本歌人出版社
振替大阪47287番
白奈良坊屋敷41番
振替大坂47287番
東京豊島区池袋2ノ931
電話(07)0068番